



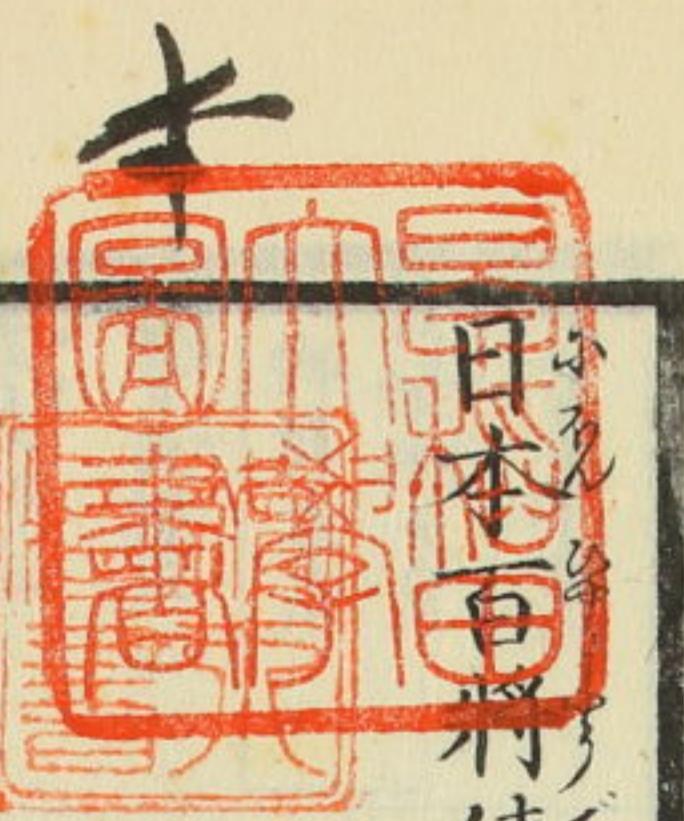
日本百將傳一夕話

九

~13
3566
9

8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7

門 13
號 3566
卷 9



日本百將傳一夕話卷之九

目錄

松亭金水謹撰

東都

護良親王

源尊氏

源義貞

捕正成

那和長年

赤松圓心

福田大學圖書館
昭和 34.6.3
藏書

君井作ノノ言差コテナ金

君玉堂雅本

宇都宮公綱

源顯家

以上八將目録終

源顯家

東洋

休亭金水

日本百神軒一ノ持卷文山

人皇九十四代
後醍醐天皇

御諱尊治

尊良親王

世良親王

護良親王
征夷大將軍

母民部卿三位局
号大塔宮

尊雲淡親王還俗

護良親王

人皇九十四代 後醍醐帝建武三年秋せらす
今安政三造 五百三十二年成

弘之騷擾在吉野壘敵急攻逃去匿

山中其際運密策數矣國寧後為征

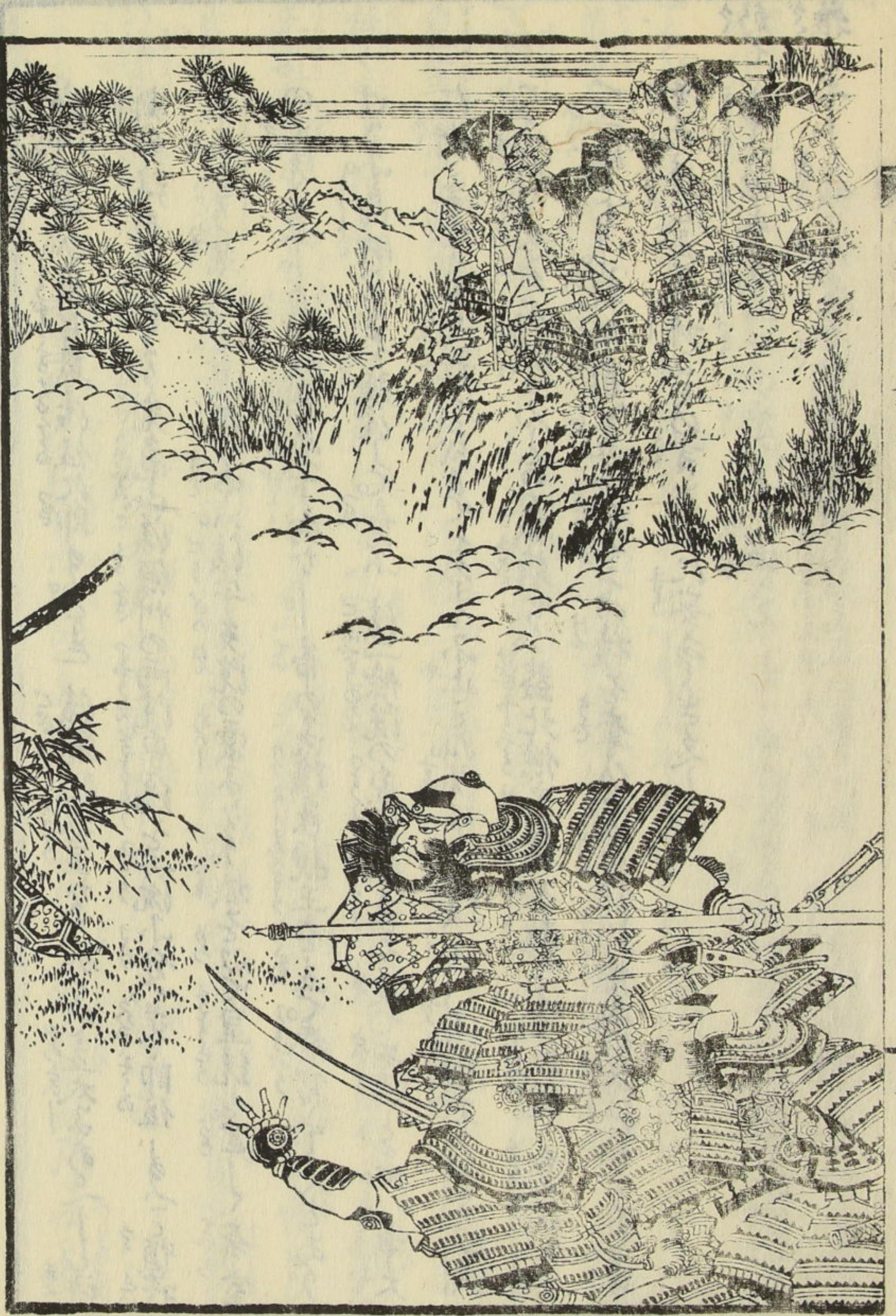
夷將軍遂被譖殺

佛門小入て叡山の魔王より一も積年武家の勇志を怒る。天皇を勧り奉り、兵を擧りひき難難を嘗て、王室恢復の功を立つとども、惣人の長吉且倭馬の計略に罹る功あらずとも殺せられ、後小膳の為に弑せられぬ天命多幸不幸。

護良親王の詩

金水桜元記 天皇の御詔教更小一朝の事あらば
文保元年九月 依又殿

崩御。ひのひ東宮尊派位に卽き。ことと後醍醐天皇なり。かくて三太ふあるべし。後
卿穿絰あつて。是より先帝。後深州の兩院南院を二流小分して。卽位まゝ一と恒寔
とある。是より。尊皇と。の。帝ハ後宇多院の愛よなり。及を以て。皇統。室
の正統。うべ。と。朝體。開泰。下向。か。帝の。子。護良親王。を。立。て。脊官。すらん。と。あり
ける。ふ。高時。ことを。聽。べ。竟。小。後一條院の。重。よ。邦。を。立。て。奉。ま。と。帝大
に。衝。こ。き。ど。も。先。親。う。が。り。そ。そ。の。ま。不。止。こ。れ。物。に。て。護。良。法。親。王。と。な。り。す。
こと。ふ。が。て。圓。东。を。滅。さ。ん。と。り。機。萌。せ。ず。蓋。北。條。家。權。を。執。て。よ。う。以。往。 皇。統。を。分
て。二。流。と。な。り。執。柄。家。を。五。小。分。て。そ。の。權。を。奪。ひ。る。實。に。北。條。氏。の。隱。計。か。す。と。後
学。の。流。こ。と。を。詠。む。ち。の。言。さ。う。に。妄。あ。ざ。う。べ
が。て。毒。北。條。氏。が。驕。肆。ち。る。と。怒。つ。と。ひ。滅。さ。ん。と。な。り。の。人。に。ま。づ。民。の。怨。を。と。づ。此。り。行。き。宜
難。う。る。べ。と。頻。に。内。慮。を。廻。ら。る。千。時。元。弘。元。年。の。夏。大。旱。と。水。雨。乾。涸。槁。葉。落。失。之。篠。宗



ありとどの義理をもて獨り。性もまづあらうべし。こふ河内守無水廣信とよ人
あり。勢及び無水の姫なるが實を以て学をねむ。帝始め祚に登つて之を承ふ入く
省中へ勤仕を。然るふとの頃准后を愛し。朝政粗廢するを。竊にあはとを憂ひてお祀
志とを知はとひども。而して減むふ恐びて。大官大納言惟通に由て一封の諫疏を上つる。す
文ふらも。夫大君天之宗干也。顯當代天育萬物。是故身法四德而教民
以五常則天下治。其身不正而無教則天下乱。今君好色失其本性。禍乱
何遠。伏翼速改之也。諫争雖非下官之事。而心有所不忍。因冒萬死以上
一言云。と時小帝准后不恥つ。さうふことを聽ひ。廣信去て勢州小屏り。妻子と
ともこうこへ。共に無水小耕を。帝徵せども曾て至らば。後兵部卿親王良足利尊氏。新國義貞
を。生を招く。小重禄を以てすまざと。遂に仕え。農婢書を著して。嘉文丸記と。元そ
六十五卷あり。今煙滅して世小傳らず。曾て承れ在けるを。藤森房と号す。藤森房と号す。あらわす

房に告ぐ。宋の大儒朱晦菴の四書集注。此より六年前本朝に入世後ひまざるのあくび。我章ひふ是を浮て深くことを眞す。信ぞ。今君小こまとを借さんとひをこの書不單くまべと藤房様ひとりどもとの学風傷佛を溉ぐて經書小ちばがぬ不康徳と食ぞとあんさきが慶信へ今ふ故て朱旌を棄り。師祖といもむ作ぎ幕ぶ。同活休顕異不大塔宮の車蹟にあける。太平記不載て子遺た。さよび今復行をうそえ。悉く教至矣なり。貧つてとゞどもこの親王不因む。村上義光父の忠義深く其心あるとあり。依てキアラハ抄出。親王の傳不食せ。以て后の臣子を歎さんと以て時正慶元年立西の皇居敷の爲不被ら。天皇聽役ふ。遷さと。かがて大塔宮の信簡ニ藏き。一寺院の候人按察法服羽車あ。皇子のこ。小隱はを。五百騎を卒て殺矣。と聞む。卓子般若經の櫛小かく。走きと逃よ。紀父の方へ落す。あの時左右小徒。者。光林房玄尊。赤松則祐。本寺相模村上長光矢因彦七。田園八郎。平賀二郎。園本二河房。武蔵房等僅に九人。

伏の貌小打捨。險阻艱難を経て紀伊國十津川の邑小到る豪士戸野兵満。重みに通ド。恩を築て防護せ。戸野の伯父ある竹糸八郎も心を合。一皇子と我姫小入。と小坐をもく。たす年の別室室編なる者。と見て大不穏。竹原が。事に。後。ちの子。手本もす。や。モト。ち。賄賞を貪ふ。皇子と様らんとまことに數面面見ふとまこと知て。恵び生ず。野のち。小計。この時芋派莊同。皇子を抱き。と新聞と居てことを俟つ。固て進退谷まことに。か。ま。芋派で。密小ちと通ら。か。と芋派が。餘不。到り利害を。況。芋派。や。青。を。我。武。令。て。す。て。皇子。待つ。擣ふせん。と。不。職。か。り。然。も。ど。も。や。く。も。憐。み。と。も。り。窮。鳥。の。懷。に。入。ふ。ご。我。捨。と。な。そ。に。恵。び。ざ。と。が。從。者。中。一。兩。輩。の。首。と。斬。て。甚。ら。も。さ。す。君。の。蘿。草。と。褐。ひ。されば。开。て。り。と。武。家。に。謝。せ。さ。す。へ。主。從。擣。と。か。て。謙。念。へ。進。え。と。侍。君。先。人。の。ひ。け。ま。赤。松。則。祐。進。と。出。を。ま。を。す。て。令。と。致。ひ。ば。主。の。守。所。ち。頼。く。我。首。と。刎。く。彼。の。そ。が。望。み。お。仕。一。え。と。言。も。経。く。佩。刀。と。接。て。既。に。自。う。肩。剣。と。ま。平。賀。を。郎。遽。て。止。想。ふ。寒。

が股肱となつて共ふとの難難を嘗め。さう龜龍のむと侍衛續者を殺さりて悲快一と思さんや。若ド君が璽章を典へ主從元率に通らん。と綿の旗と芋厥小楊ひをきて脱走。徑と二里。小村と矣。光ひありて衆に後き。一人地来るに芋厥が郎等觀王の凶旗を擱て在る。怪しこの故と向小如此と。又村と大不憤。今皇子賊徒て征。國家を清めんと。の西行途で汝等の妨げへや。とのひく件の吊旗を奪ひ。その奴を極えずくさ。あけ。撫ると。又可。芋厥をもて敢て逃。村と廻る。追著て。旗を缺どことを悟る。皇子大威。さひ則祐。忠ハ孟之舍が義を守。平賀が智ハ陳丞相。御。御。北宮歎が勢ひて。清けり。天の三傑を我。福。豈。天下と。活めざんや。と。大小勇。こ。放び。玉靈の莊司が。餓れ。剣。不。の復闇を居。南。北。庄園へ。郎と。夫因。モ。遷。玉靈不利害と解。有。居。玉靈更。小。肯。を。剣。の。兩。倅。を。五。所。不。害。え。と。數。人。そ。て。遂。薦。る。庄園夫。因。止。ま。集。等。と。妻。時。戮。ひ。ける。彼。ひ。支。勢。此。の。兩。個。庄園。數。多。傷。て。彼。う。夫。因。是。七。因。へ。端。止。ま。

お對ひて。我。敵。を。負。て。活。が。足。下。卑。く。性。て。君。小。告。よ。我。ハ。と。内。所。先。を。免。べ。と。言。内。經。ら。ぞ。群。が。る。敵。の。中。へ。薦。入。て。討。ひ。夫。因。ハ。生。す。り。か。ー。か。ー。と。言。せ。ば。宮。吹。ひ。さら。ば。各。准。備。あ。て。そ。の。敵。を。防。ぐ。一。急。き。ど。の。衆。寡。敵。せ。ま。必。我。の。討。べ。差。犯。さ。が。る。面。の。度。を。剥。て。敵。人。小。苦。と。か。手。と。あ。る。と。吾。と。あ。れ。た。せ。う。と。の。を。天下。の。官。軍。望。を。失。ひ。義。弘。大。小。池。む。ー。と。左。右。小。令。と。傳。り。す。お。盡。が。兵。卒。薦。地。小。池。來。わ。そ。て。徒。捕。に。せ。ん。と。ひ。亦。松。村。上。の。餘。の。兵。士。と。先。途。と。防。ぐ。ち。う。野。長。瀬。六。郎。及び。七。郎。半。竹。筒。の。兵。と。卒。て。皇。子。を。援。ひ。小。未。る。に。遣。ふ。お。盡。が。勢。ハ。と。と。不。忘。れ。勇。氣。孔。強。け。く。と。逃。く。皇。子。大。小。欲。び。り。ひ。野。長。頼。尼。弟。が。功。で。勞。ら。ひ。ま。す。う。吉。野。の。城。穴。ま。か。と。正。慶。三。年。春。二。月。東。兵。大。举。を。と。補。正。成。が。守。る。處。の。金。劍。山。あ。ハ。陸。奥。右。馬。頭。ま。と。吉。野。あ。ハ。二。階。營。道。蘊。二。万。修。兵。不。約。く。と。金。三。委。と。攻。輕。け。り。禁。る。に。城。兵。固。く。守。り。と。輒。く。と。と。と。接。て。能。す。を。と。と。小。城。導。吉。野。の。執。行。者。岩。葉。丸。と。く。る。う。の。こ。の。城。後。は。陰。阻。を。人。跡。を。絶。ま。と。と。と。憑。ま。と。守。ま。と。措。ト。若。ド。城。持。て。築。り。ん。か。

と密に城の背へ廻る。果たて空旗をさるの三人、名りあぐれが大歎び追ひの軍と相思
とまゆて恵び入る。ちか便宜を候やどん。既に追ひ小軍始む。聞の聲矢叫びの声。と小把さう
ふ吹えけまた。時分からもせと岩葉丸岡を守と揚ふたり。城中の兵を主と呼ぶ。被る櫓木に數
あり。人數を分て防ぐことを當下豫て準備せる。投炬火小火を燃す。城中の陳え限ともう投
入きされば折角の夜半の北風。小鳴十方に起哉りて猛火燃ふ。城兵不濟猛一とひど。
前後小敵と度火小包もまて。如何ともするべし。賊兵大不寧三をあ。勝ゆ素戔進入。
も宮殿近く逼る。大塔宮にて候。自同身長刀を抜き。二十餘輩の精兵を左右に徒々擊
て走搏殺をさと。數回勇勁繫其くして。あはげて。東兵大不遜き魔く。其まよとの大軍さう。
宮中數箇所癪て負ひ。鮮血痕ごくとて。環小盤すども。言笑自如として。拭ひゆやく。最
期の酒宴を催す。時不本寺の相模房。賊の首を辨ふ。貴き坐て起て。お車てのまこと。其延
劍戟を離れて。電光のごと。壁石岩を走りて。春雨小似す。然りと。ども天帝の御出迎

す。却て修羅の身と被る。と崩御の下へ落ひて。遍縹うせば。一坐の軍兵俱ふうて。是は
固まふ縕ひけり。且下強火燒小うて。惡煙服て蔽下。更小屑とせむ。聞の聲耳と貴けど。
まことと。以ざる如し。士卒たゞぐると。飯まるがく。恭然とて。きの聲せと。草平村より
四郎義光親王の正前小重つ。敵を近づき。頗る恭をりべ。然き。賊の大軍必定
凶跡と慕ひ。さんぞと。まき所萬あぐら。君の權力で。臣ふ。禍。臣凶禍。首目とて。ふれさん。ちの間小
落仲。と。の小聲生。轉り。おれ。我小從ひ。南紀の尼小難難と嘗。今この急の期に
隙。と殺して我活んや。汝死まば我ゆたせ。と敢て。片づかひ。義光大不諒めて。いぢ。君夫
下の爲に大軍を起す。今利あつて。困をふ。遣り。若君此如ふ。死つ。孰う有て。恢復の功を
きまうのひ。君の國家の大車を繋ます。宣傳店と称へ。と向う。起て。親王の著
り所の縕を解く。親王泣く。宣傳店と称へ。と向う。起て。親王の著
福と吊り。と簡へ。と遠と。おれ。義光大不諒びて。親王の縕を著す。日の旗を傳て。櫓小登す。大

謀官と稱して自殺し。四方の軍勢一所を集り。こゝに萬騎を備へけり。親王はこの勢にて河の北を
すまは。こゝが若葉丸親王の城と頃まである。五百名兵を率て跡を發ひて下親王に逐ひ。義
光の子義人を麾曲遁れとまで支え。敵を斬るて數十人戰兵怖ませて追つて、義隆と下防ぐ
と。良半時餘にて、千より數箇所の源を廻りて、古今をも見まではう。官も遙れ、暮るん。
と見て林藪の中に入り。自殺して失せなければ、是より向苑人義隆父とおと俱あせりといふ。義光
者て大本懐と同く死さざる者の為小死せ。こゝ死して何の益ある。烏鵲の白癡と罵りと見渡す
の心と棄て、親王不従ひける。今う果て、初の如く父が遺産て果一けり。

按られ本朝通記か。この父子と贊へていたる。義光初從皇子自廻歷南紀之間
以往百戰万危不顧其身遂以命代君之大事。真千古之英雄可謂猶歩
前後護良先以義光比宮黙宮歎猶有勇無義。如義光父子勇也忠也。
轟然傳萬世。漢有紀信我朝有義光孰人謂其忠之雄劣乎と云々

ト
是うは、大將官と捕正が討らひて、河内四金別の更觀心寺に退去を奉は。即ち
妻子ためにもかうせること。かくて帝の隨波玉に遷されて在へける。天運煩攘の時や來れ
け。永弘二年、二月、下旬、依て本富士名判官義綱心を頸げて、先帝を救ひ出さんとか
けるよう。聖雲を載て、滝谷高負名和長年、お假るを語つて。先帝を寵む事。聖上の御
お入を奉は。てお放て。四墨中國西國の紳士とともくと。多く官軍に薦へける。されば東西一
時代。かと。新田や太郎源義東に兵を募て。百姓百勝豫食にうち入る。北條一家を滅
せり。固て、先帝重祚。一のひ。徳民泰平の日が過て。秋ふ葉に復興。親王の兵と大和の志
貴小モ。戎衣と解び。洛小入をひ。因て坊門清忠と勑使うて。今天下一小敵に然る。猶
兵と備へ。裁外ふある。何をぞや。四海齊心のその際。ハた難て救ひん爲小戎衣と看り。とも
世號ひ太平に及びね。生々速に境獲を解て。跡相承の業を廢べ。と詔を告らん。護良

卷之九

卷之三

對へまへやう。海内一時に安つて。聖運忽困くると陛下の聖體にありとのども且ハ微臣が功
あひまく。然るに足利高氏ひそ一城の功ト誇つ。弟人の上に立んと欲ん。今その勢の微
あるうちにはせどんば後必大ある禍ひあらん。をと渴くるを塞ぐればかならぬに河と
なむべく。樂くまろと赦ゆどと。本くらと奈何せん一賊滅び一賊あり。と前門虎と拒
まと。後門狼と進むるなり。固て臣グ武を解ざる所。明ふ事より。且平氏頼れ滅びまと。
猿賊いまど鐵またび身を竄。一陣を窺ふ。この時小まつて傍陣れ還らぶ。朝家ふ平城
とて衛（あ）人考へ誰也。臣思ふ。而て一門跡を守はし。武臣ふ元帥とて朝家を禪はし。モ
ふ家の用執まども。と清忠こまを報令し。事こまとて叡岐ありて。高氏が不忠何生す。ア
系邊つて功臣と刑せ。天下の士僉歎惑を生す。再び勅令の囁を聞え。のとぞくにあ
う。武臣ふ元帥とて。その績小任もべ。と別ふ勅使をえらはし。征夷大將軍に仕
す。固て護良兵を率て。不日に入京。一氣とぞ。かくて後もちの氏兄弟。自立の志ある

常に無て據て縦歛せんと。尊氏正慶二年足利高氏誕生位小叙とまどて嘗て准后に賄
し頻々小遣を親王を免れ。その辨候至り盡せり。こふがて逐跡あり。官で遠くふ竊せん
と。嘗て大・小慈へ誓書を缺ど失心あき。滅を純りよども。候者のあひ譚
らきて。遂に足利義を以て。護と。護送せしめ。豫金三階臺の獄中へ下へ。親王罪に
あづけ。竊せり爲て。慈へ懲り便宜を以て。その旨と。慈訴りよども。候人道に様ひを。
さうて。敵を不達さとす。奉弟八の皇子成良親王とす。延英お軍とす。護送れ
續で豫金に附り。重義をり。執權とす。重義、自威を授藉し。ますく。権勢を養ひ
けり。是建武元年夏五月。小あん。その翌建武二年七月。北條時行信濃に歸す。平族
の脅迫を催し。信州小兵を率ぐ。重義大不敬るき。院内小山をねじく。ことを防せき
れり。むろに時行相模、駿河、信濃の残勢強く。両刃竟に討死。教後豫金に入られ却づび。
遂に支えと。得ば。將軍官を推す。豫金を没収し。重義心不ぞぞ。今時行。營る

等一時威勢を張るとひども滅せんと氣ちじ。さる家を盡むりの獨ての獲良之如ト
この紛とお失うん少ふ。とその臣側部仲空守をしてかの徵小到らし。縣にてことを弑
けり。嗚呼懲ましき國家の為小功業を立すども殺せんとび空てく僕者の毛頭に罹る。
史を儀りのこ下至つて维々長大息せよとえま。親王の圖贊れども忠孝排君父難
折衝威何侃々。彼婦舌利於及。諸室書有就信。

接るに本朝通記に云々。云々尊氏至存異志欲早悟除其暴可謂明矣。惜哉其計輕舉而傳聞敵家良策却害其身護良寶欲戮足利之暴潛志不顯其情審彼反謀之实奏天皇而後討之可也。皇子之計慮不至子斯ノ如清忠之姦卿卒爾奏大事。曷直義之邪佞准后之功言不構讒口拒其奏乎。直義准后之惡固不足道護良亦招延其讒者歟

云々とスヌえう後學の人味リベト

八幡太郎義家

四男

式部大輔

源義國

從五位下

義重

新田次介

國康

左二門督

義康

足利刑官

尊氏

足利三郎

貞氏

從四位下

元弘元九月五日卒

正三位

權大納言征夷大

政大臣

延文三年四月晦日

薨五十四歳

等持院如義仁大夫

等持院如義仁大夫

源尊氏

人皇平代崇光帝延文三年薨

今安政三年四百九十九年成

源尊氏者清和源氏之冒也元弘之亂奉

後醍醐天皇之詔攻破六波羅使翠花

稱征夷大將軍以入京既而奉光明帝與

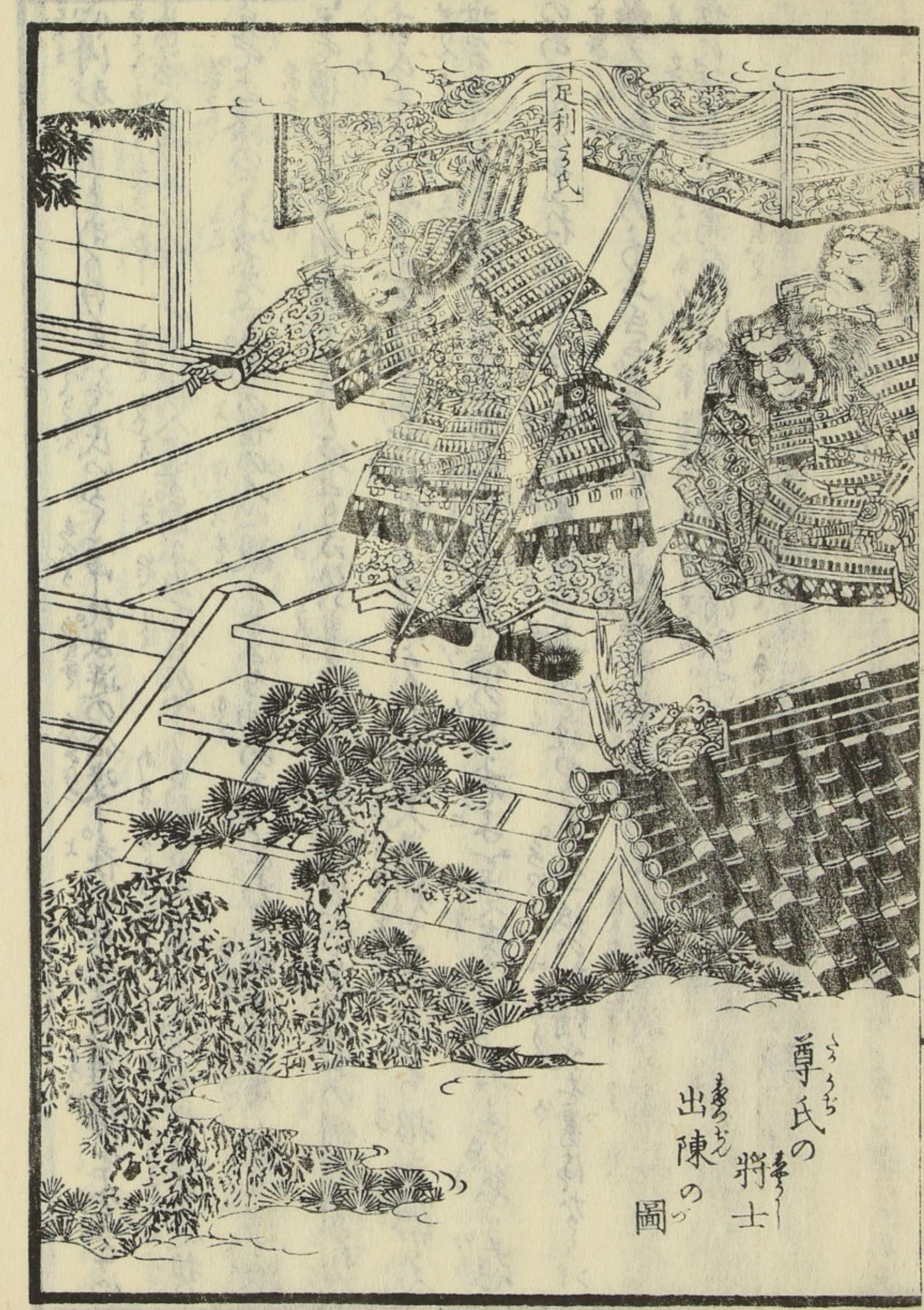
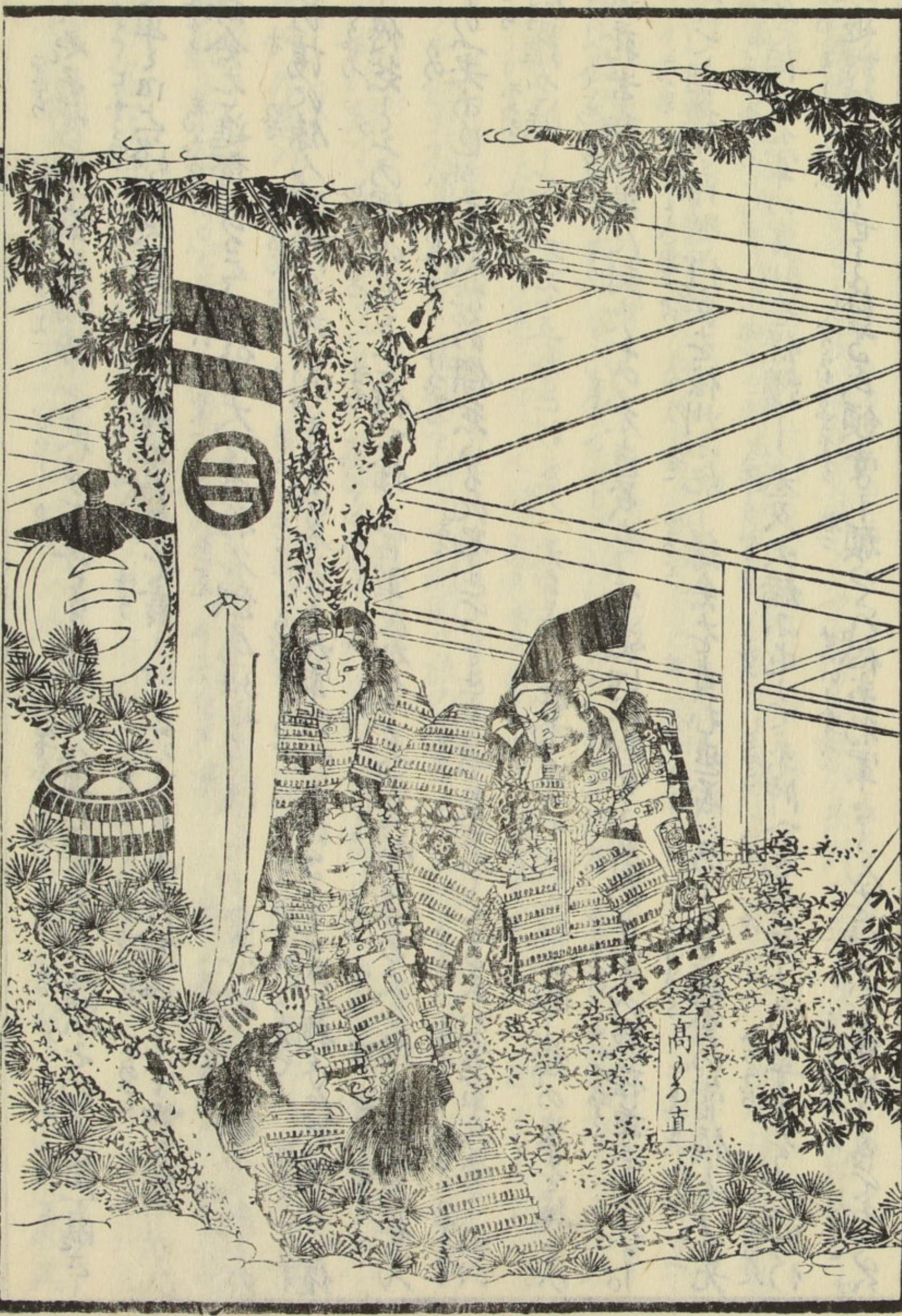
多艱難備嘗四海漸平累世開幕府

百将傳古卷之九

源尊氏の話

家系の前に久松が如く。以て元弘の乱死つて。先奉船にて殊幸う。四五西國の軍兵共
逃く。官軍に屬す者十六波羅の淮進頻々なり。と小固て相模入道ことを發。猿人
が爲。名城尾張守を大手のねと。足利治部大輔高氏を搦みのねと。て速に奔向あ
べきようなり。然るにちる氏の父の妻に居て。いまだ健ひ七日と経まば。懲歎の渙乾さもや
び。殊不所勞に侵せまこと。紀居もまき。姿うるざる。小費向の懲促頻々なり。高氏心冲穢
きなづら。や。憤つて食ふ。時不幸にあらず。餘方きとのひろぐ我の源家の半族
あて。二代の軍の連枝ち。この縁を絶て。一度ハ君臣の縁を絶て。是までの沙汰
以及ぶ。身の不肖となりひまづ。偏に入道の禰夷ち。所詮と洛をもわざく。一家竭
て洛に上り。先帝の御方次第。と兩六波羅を滅して。家の安危を定めん。と石ひつき
りひけり。相模入道かくともかく。び。藤左衛門尉を使ひ。あどかく上洛の巡り。及ばず。

心源がくと。ありけ且。巴氏のゆく。心中に反逆の企て。夜を以て。急に準備をす。乃に
長勝入道圓森。怪にて相模入道が前ふ坐て。言ひやう。足利する氏一家を禍。女性推究追撃
え。上洛の。一候そ。今世の人心觀。き。小ゆ油ぬる。む。一城を少く。庶民。四。而
は。闇令。本朝の。と。う。と。ひ。或ひ。妻子をして質とす。と。古より。例あり。されば
す。氏を召す。き。と。の妻子と。狂の。と。ひ。ひ。相模入道則する氏。と。うち。相手。誠す。え
世の。ゆ。少く。如。此と。と。ま。を。と。在。也。赤橋の翠老。子。と。ま。を。産。一。母。と。翠老。夫心
の。ある。べき。ある。ね。ど。と。人。と。塞。が。萬。あ。比。妻。子。と。狂。ゆ。と。且。一。紙。の。起。續。文。を。書。あ。な。バ
維人。と。義。す。の。ある。べき。と。の。綴。宜。く。恩。被。あ。と。と。ひ。ふ。す。と。も。氏。も。脚。と。慮。ふ。往。い。れ。ば。
彼に歸て。坐す。高麗門脚車と。御。川。太。李。助。清。氏。ふ。と。あ。し。ん。と。残。が。る。大。君。の。因。爲。小。无。通。と。織
ひ。よ。や。ひ。あ。る。誓。言。と。載。ま。と。神。明。佛。壇。何。せ。咎。め。ま。ん。や。また。脚。參。所。公。達。の。と。この
殘念。小。重。き。と。も。敢。て。愚。あ。く。せ。べ。と。の。故。ハ。赤。橋。殿。の。息。女。う。る。孫。う。り。幸。う。孫。う。り。あ。



べキ。是等の小車に猶豫して大もと過ごくびし入道刀称ぐるの隨ふ。その不審を懸けて早とよと落あるべきものと理を盡して言へければ、さる氏竟心を決して如くにす。豫僉を進發するに於て大手の物名鐵尾張守も後を下と軍を促して上落あり。既而戰ひの場に陳んで東軍太小利を失ひ名城も亂軍に討まけるが、さる氏の獨主にて酒宴を催し優然と。その軍の果るを待て徐々官軍に加りて、自餘の係方太小利り脱れ退散んとなり。老あしがその威勢の傑然なるに心までことを遮らば。かくて、民ハ官軍に屬す。兩六波羅を滅して大功を立らしけば。天皇大小松齋ありて從三位小叙。譯の事を徴す。武元嘗て陸下總に封す。その弟赤義をして遠方に封ぜしも固て兄弟の威權並ぶのを。かくて相模次郎時行兵を信州小記。豫僉を責む赤義ころとき豫僉の管領として元勢と周て羽軍の宮良を保護し。參及夫橘小屯して系伸へ急を告へ。が尊氏をそばに。の追討使を命ぜしは、さる氏領嘗て頼りの征夷羽軍さんを請ふ。帝嘆へて召す。

功の深淺不辨べきより。とまづ関東管領とす。その氏歎び京師を發し。佐秋の中山に残ひ。賊軍敗きて、その方人名城式部太輔聞死し。殘兵悉く遁て奔るを遂て豫僉に入は。時行相模、登高姫翁、逆ひ残ふ。尊氏まことを敗は。城ね勢ひ竭て自殺し。餘黨遁亡。は、小及び東州頼て平定し。かくてその氏功に跨る。初め京師を護る時征夷羽軍の功の深淺に拘となり。其を一舉して賊を平ぐ。お勳功大きり。今ハ勅諭を降るに及ばず。と自ら征夷羽軍と稱す。裳舞を辭す。新田が族の領する所の地を以て諸士に授く。新田義親を弑まる。と考へ。天皇を驚かせてことを知り。太不怒を奏す。おもと御内侍。うもつえの御内侍に怒り。ここゆきの臣利の族の領する所の地を奪ふ。かくて兩家相執り。その氏使を糸師に遣り。奏状を捧げて義親を殴る。義親もまた奏状を捧げ。その氏の詐偽をび。獲て且より再び強引となす。箱根行の下の合戦をまび所に於て逃とあり。每度東軍減利を失ひ。その氏率て敗走及び脱して、もと氏へ達長を入て別營隠衣の姿となりて罪を朝廷

に謝せんとあひま下足利を義義へて其重能と相謀て隠疏を懇めことぞ長崎及び福島をも
倫旨あり。とす氏小役せしむる尊氏抜きこそを取る足利尊氏並義以降。武威ふ勢て
皇威を絶んで縦面缚をも軍に降り。隠遁して衆を謝りとも刑伐を實ひべしと尊氏
こよをうて腕をうらだ然もれ於て今の限も拒む事無くとて法衣と腕で戎衣を著を
緒軍大敗びて兵威薄く蹙あつ頬て二十万の大軍に及ぶこの時竹の下の城ひに官軍
大不利を失ひて義良京師へ引かひ尊氏尾才威勢を震ひ京師に責入るに及び騒
て八十万騎と私に因てよろ英毛を遊んが爲。奉勅に遁きの義貞放逐を供奉
次。そよぐり奇計殊界を廻りて新田是利楠の二家。各威勢を震ひ勝負交きり于時
延元年二月義貞頭家正成の二羽坊州豊後河原に於て。そ氏直義ると大に戦ひ竟
に。そ氏を追崩ひ。そ氏遁きて九死に走は正成義貞に謂てのちく功ひ威難くとて敗き日向
續て宣へくる氏を撃べ。備ことを忽にせば。尊氏再び威を震ひと勧めにけども義貞

八月妻久米内侍の別室を惜み西を攀ひ正成屢陳むるうれはしあとど果さず。
も。氏宗儀太官司の彼に入りてようり九死の諸ねを語らひ且持内院の院宣ても受。同五月
詔書を發して海陸より京師にむふ。奉勅貞正成小役してことを防ぐ。かのとよき正成
ハ兵庫に陳。義良求女様のきえ坐て防ぐてすとど水陸の敵。すと八十萬騎と。也。衆
寡敵まことに極をば。正成邊川に聞ひ免し。義良太小敗をひこ不若て。奉勅。奉勅に遁
き。そ尊氏敵山に使を立て。還章あらんとを清ひける。奉勅とを許す。義良使て
且怨と眞顕て奏聞。奉勅太小敗をひ。則太子恒良を義良に託せしと北國小卦。うむ
義良謝く怒を解て東宮を奉ト。北國に之き。金ヶ瀬の城に入は。かくて奉勅。よ。入洛
キ。そ所奉義良との還章を送。奉勅て花山院に幽。供奉の諸兵て禁綱ある。その後葉池
宇都宮答へ。通じて。奉勅に解ると。今ど奉勅重氏ハ歎せしは。奉勅氏が失望を知る。驚け
遁じて吉野に入り。新ひ奉勅を立て。南朝と私ひ。奉勅光明院。豊を立て天子と。

とを北朝と私けり。慈とども二種の神益。南朝の方に在る。神豈うそと即位ある。前後にこの時のことをめて。美濃へ北畠に在て。屢々威を震ひけど。憲允の様で攻るに及び。流矢に中て死。殘兵猶く滅るに因て。二の天子坐すも。天下大半北朝。帰し。足利氏の武威熾烈。心美ぬ軍の職小備。竟に十三代の基を開く。時時きみ。南朝の諸侯。貞正成ひ。もさうか。頼家長年。餘のぬ士。とふ忠を名ひ。義を存じ。衣の為に命を惜ん。智篠勇略共に備づ。一も胸の所す。慈とども。皇運の因く。小衰ゆき。久ひ。是より後五十條年。吉野に身を居。一も。終に力竭て。一小歸し。足利氏の君臣に。わける。勢もまた。巴及。僕の人多く。既に。軍の矛を差す。或と。死。ハ教く。南朝へ降ることあり。衆人。美に薦す。と。ども。幕府を。開き。え。孫に傳ふ。實に。す。氏公の洪福なるべ。

而て。又。此草頭太平記。及び。諸書に載て。人備くことを。ねること。其暇日を。挙はのこ

八幡太郎
義家三男
義國宗領

源義重
新田大炊介

義兼
新田藏人

朝氏
新田三郎太郎

義貞
左兵衛督

左近衛中將正四位

義顯
新田小太郎

義興
左兵衛佐

正四位下

義宗
左少將

武藏守

源義貞

人皇九十七代 光明帝暦應元年卒
今安政三年 五百十九年 成

源義貞者得護良皇子之令旨而舉義

兵攻鎌倉屢戰屢勝不逾月而高時伏誅

後醍醐帝再踐寶位義貞之功不少未

幾足利氏作亂義貞秉勅征之連年百

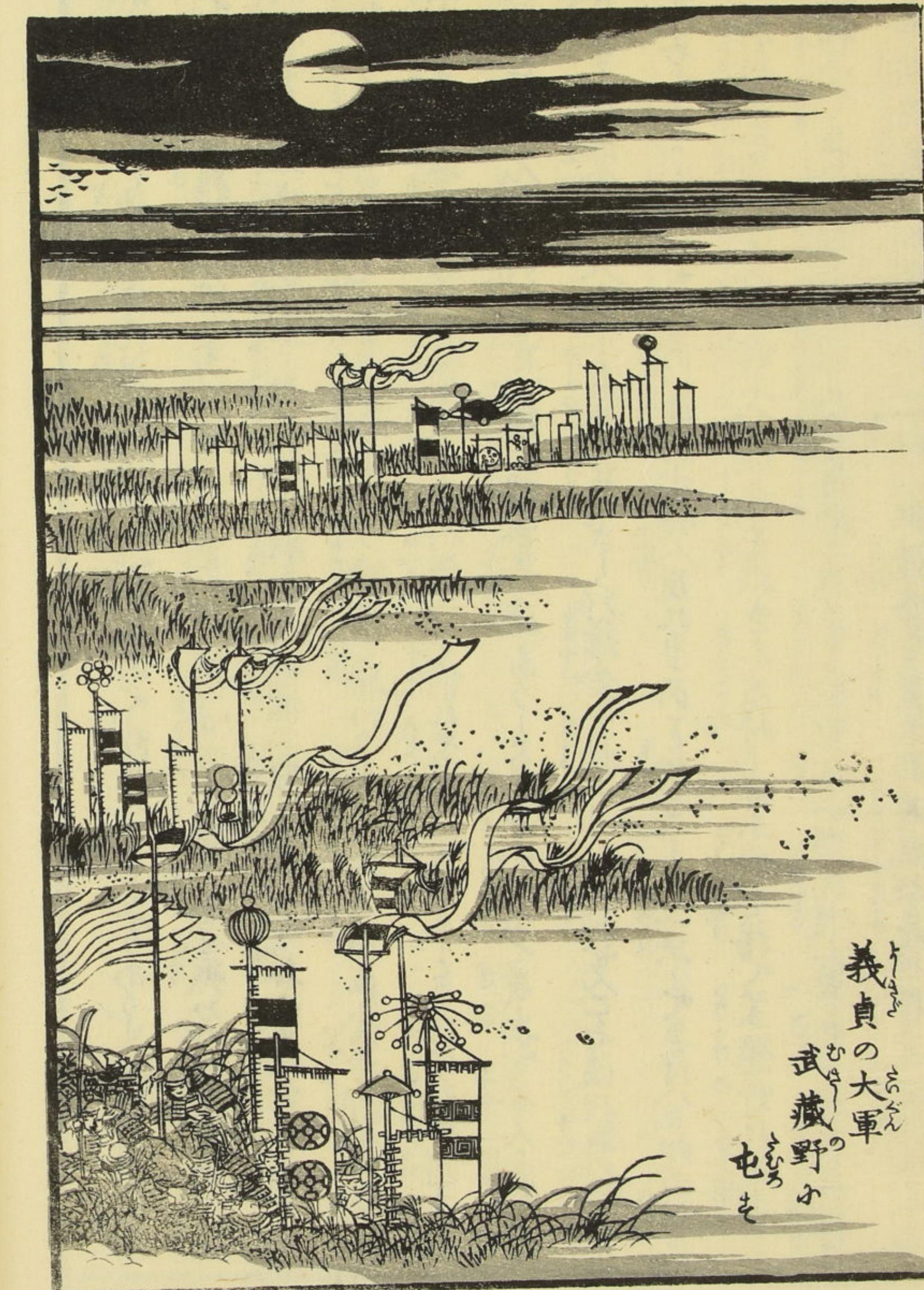
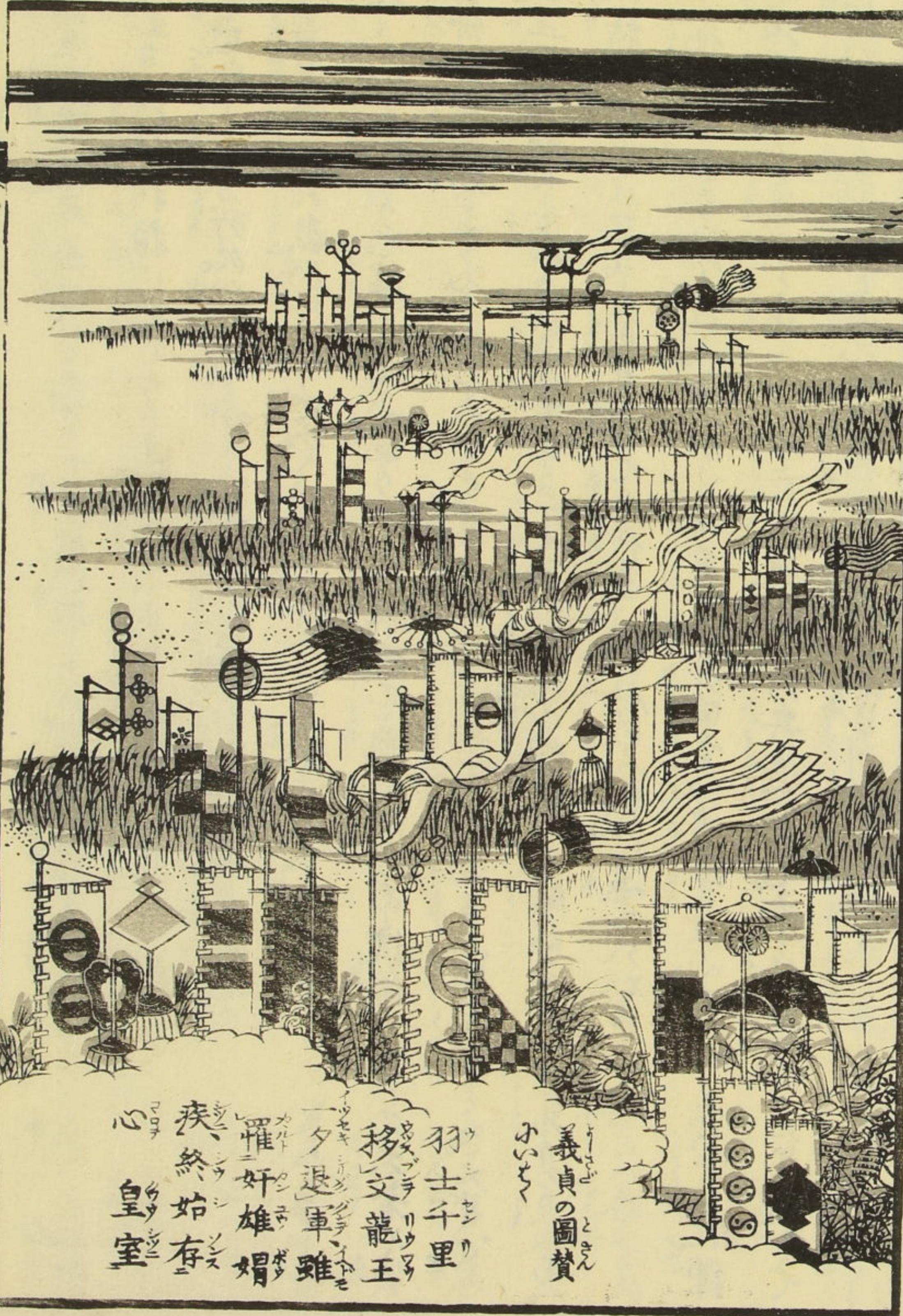
戰官兵遂挫黑丸城下白矢殞命惜哉

甲斐源氏下山が。賀美後負に。自立を。勧む。後。奥村君臣の。義と。争う。不敢。毛に。從ひ。由良。叔田も。勧む。後。奥村も。從ひ。毛に。因て。甲斐の。三子。源氏に。參ひ。美濃の。義。心する。氏と。信と。遠く。

三才との十才

猪め新田小太郎矣。貞。縁金の催促ふよう。一族、即從を引俱と。半剣破の事手にかづり
。彼城外に在ける。もね。二月十一日。元弘。先生。後醍。綸貴。而纏ひ。虚病を構へて。ま
小飯。便宜の一族を密やくに招き集むる。そのおか。相模入道の食事四郎左近大夫
泰家入道二千万鷹の選兵を率一上洛。畿内西邊の札を携えん。と縁金を進収ひ。もの
兵糧の為にと。近畿の庄園に餘時の裸役を掛ら。就中上野。新田の庄世良田小。
有徳の者のまで。出雲今親連と。足利四郎入道兩人使節と。てててて小束つ。大れとまと
遣責ひ。義興とのとて變て。奪怪く。不鏽のきと離人の罵の歸。小束さとん。後代。その心
原なり。と數多の人數を催して。先かの両使を。捕へ割へ。足利を斬て。世良田の軍中。以梶
け。相模入道。及び。相模。新田が所業。捨あ。が是よりて。妻家。て。忙。慢。の輩。大札を
與せ。ひ。遂に罰。と。武発。上野の兵に。令。ト。新田の氏族を撃ひ。と。義興破て。族と
を。も。も。

集め。如何せんと後せん陣に成ひ。利根川を前にあて。防ぐべしといふもあり。またかるに當時の勢を
りて。敵對及び難がん。ひとまづ此處を退き。鐵邊の様方と牒ど合せ。城ノ内とりともあり。諒
義紛ごとくて一没せま。お下戸良貞の弟服屋義助。進へ出で言ひやう。名の実とするところ。
我欲する所と異なり。安家。先事より論肯て囁ひ。今義兵を奉は小室り。まことに敵の
旗をゆふを。退せんと比帳き。まと利根川を前に寄て。防ぎよりとも敵の大軍河を渡
らば奈何せん。さまで宣肯て頗れ頂き。馬一騎ありとて。事中へ打出て義兵を奉人小勢著
ば其きた。兼念へ打入るべ。裏勢の著ざらば。兼念を枕くと。対にせんことを後代達の譽を
あらわすことあり。一之。ある坐の一族、守護人現れゆとの工を築くべ。と一決して五月八日卯の刻に
勢を揃へ。生馬御神の宝前。て。論肯を被き。三度拜し。て。小旗を揚て。笠懸野にあむら。
相從ふ人。大坂二郎宗氏。子息孫二郎幸氏。二男孫二郎氏明。舅夷二郎氏柔。孫に
二郎満貞。舍弟四郎行義。思松二郎經家。里良五郎義胤。服屋次郎義助。江田二郎



百將傳一百諸卷之九

碧玉堂雜志

行矣。桃井左郎尚矣。こどもを宗廟の兵とて。百五十騎遙か遠ざけり。かく如何
とあり。所に利根川の方より、馬煙つて矢を複ひ。軍兵二、三千も説ぎやど。況々とて地来る。
繋る彼敵とする所れ然ひあらずて。鐵後一族、見鳥山向中。大井田羽川の人々をもす。
妾自身兄弟大に歎び。りそにそか遠う。一休らの丁と櫻にて。若生歌一とくをもんうだ。箇
様このことよりて。緯不意ふ起り。まよが羽檄を飛ひ。暇もあらず。頼の未著へ実
れ佛神の眞助あらず。と呼つてうち歎び。被へて馬と控へ勅宣ふ。國て此の下也。大喜て思
ひ立てば。時日を経て。參著あらず。一人の天狗と休事中を觸はゆ。一族元氣の重あく
べ。羈つて向ひてはなり。と馬より下て。乞代あり。この船の人数遠き。かきず。四月へ參著
べ。他まへおゆりさんとあらず。との勢と傳え。と木井田を江戸に言ひ。木戸にまわせ。陳
を張て。明暦を遅一と傳けるやどに。甲斐信濃の兵池からて。五十騎遙か遠ざけり。かくそ
何の仔細あらず。と内侍武義野へと生す。ふ臣利ち氏の子息千壽王。紀五郎左衛門

を徒へ密に糧食を括出。二百枚馬にて馳著り。程もあらず。上野下野。上總下総等
陸武義の軍兵を招び。雲霞の下。馳来つて。千幕方に至り。四万七千騎兵とま
まがさ。ゆふ。彦武義野。月八尾表のまなまで。こそ列社する。歎戦の間。すく馬鞍の
上を輝き。而も麾ける旗の影には。それを糧食ふかこのよ。號て。畿内九國の礼きのまう。
藩雖のゆき。起る。實に天下の大車。と。金澤武藏守貞持。五幸餘榜を相副て。下阿辺
の支。下を。二隊へ。櫻田佐那大輔。奥國を大ねじて。長濱源郎。すと。加治二郎。左内道
ふ。六万五千餘榜を副て。入間河へ向ら。とける。かくて。安國へ。武藏。小手差系。入る河。とうち。渡
櫻田長濱。が。兵れ。社あり。夫。よう。度。の。食錢。小源平。互に。勝敗。あり。竟に。糧食勢利。うじて。參
敵を。え。これに。がて。新田義貞。糧食。うち。入り。福村。が。渡。に。龍神。を。わ。湯面。忽。千鷹。と。う
て。軍兵勢を。渴。う。し。す。相模。入道。力竭。て。門。自害。ひ。及。び。一。と。裁。て。太平紀。に。祥。う。か。て。軍功
奉。あ。ま。が。あ。と。う。き。さ。ち。う。ぢ。え。の。費。を行。新田義貞。左中將。ふ。は。ま。と。上野。捕磨。に。封。せ。ま。と。食事。義助。へ。後。河。を。渴。う。

然るに教程きり足利す氏僧とによりて招を受け。義良東國ふうち向ふ既に了氏敗をて。危ふじゆ供福あそ頻々。不威威を震ふよう。義良更に教へぐ。茶師へと引導す。氏連裏脇に。亦。茶師入まつて。主と義良遊ひ。義良正成をとを保護ひ。夫より計を施して。足利を退下し。尊氏と。不對する。と。解を。丹波路もとを走ませて脱ひ。因て事ふ門より入洛し。また小尊氏兵を調へ。再び茶師を襲ひ。と。次義良頭家畠正成の。之ね。并及豊後阿原に敗は。子氏兄弟大に敗。且。船に。また九州小毛は。氏九毛の兵を督し。八万騎に。ね。と。水陸より。落次。時に義良令を受て。ことを。兵庫のき。防ぐ。兵糧も。流。寡敵せ。と。大不敗。と。ゑ。敵の圍て。事へ。敵山に逃り。ひ。子の軍落に入。禁闈を焼失。ふ。義良一箇の條を。受け。賊軍の糧道を。断。その機の。居ます時を。候ひ。諸君と期を約して。接。と。攻。高師。並守。アモ失ひ。半。陳脫に。た。ま。至。は。こ。に。す。氏の。既。后。土。波。惡源。太。万。死。入。て。戦ふ。す。官軍大に。勝。易。か。師。並。す。と。敗。兵。と。集。め。堅。模。れ。防。ぎ。城。又。官軍の。よ。度。と。

失う。義良に義良諸方の。の。期を。遅。る。を。如。ん。服屋義助名和長年を。副。ね。く。て。出。る。ふ。賊軍大。小。遊。ひ。戦ふ。連。に。指揮して。ことを。數。り。頼て。東寺の。門下に。到。る。義良。て。居。跡を。知。る。大に。尊氏を。呼。ま。す。と。そ。連。年。天下。兵革を。若。し。罪の。民人を。殺。す。と。唯。吾と。汝。と。在。つ。今。吾と。汝と。戦。ひ。この所。にて。雌雄を。決。せん。頼。く。生。よ。と。大。喜。變。罵。ほ。を。被。て。是。利。す。武。達。に。生。て。戦。ふ。と。も。と。ね。重。強。き。号。を。凍。め。義良。條。合。期。せ。玉。モ。大。不。勝。方。の。敗。す。を。り。と。君。と。戦。ひ。そ。の。辱。と。雪。め。ん。と。そ。窮。境。猶。を。咬。の。勢。ひ。あり。と。互。に。對。し。ま。ん。と。心。意。み。ま。小。似。る。べ。と。鑑。れ。携。て。往。め。ふ。け。と。が。尊。氏。も。怒。り。解。て。竟。て。坐。戦。生。士。平。て。と。義。良。の。後。を。替。じ。む。義。良。固。陳。を。き。て。と。と。を。防。ぎ。且。祇。軍。を。突。敗。は。因。て。戦。軍。大。に。忍。ま。忽。忙。不。聞。け。魔。く。義。良。拂。く。聞。ふ。と。御。る。と。と。を。悔。ま。よ。す。後。足。利。氏。の。小。傳。に。の。よ。く。作。禍。を。り。天。皇。に。奏。し。帰。洛。を。辭。し。ひ。く。が。義。良。恨。え。ま。う。次。ゆ。る。則。恒。良。親。王。と。往。北。金。に。赴。く。む。義。良。稍。怒。解。て。太。子。を。奉。れ。哉。前。の。金。が。傍。に。到。ば。ぬ。途。中。に。そ。大。雪。に。あ。ハ。人。馬。多。

く漁えにせり。敵く全が傍に入及びこの困兵をもて一所ふあんハ禰の臣とぞ。と義頭に三千餘兵
を率て越後へ赴く。も援助に一千騎を率てて、庶生保が松の城へ入らしむ。于時足利高弟。
間を放つて保が當を効く。も保志をす。常に通じ。援助小反き。も保が弟義連房。まこと志と
補さむ。保が及心を告ぎ。助らる。也。義治を匿す。時を伺ひて。發せん。も。援助請て。金が傍に
帰る。是より。帝。京師を通じて。芳野へ入らず。と。號え。保がび北畠の諸士多く至り。且く威を
しけど。バ屢残威を廢ひけり。義治新善光すの城を漏れ。高弟逃亡。そとひども。將帥奉
の兵勢強く。瓜生保及び義連房。越前の敦賀に残り。春。二月。速武。金傍陥落。し。も。良親
王及び新田義興自殺せり。又。貞兄。才松。少在て。越前の諸城を降し。且く威を廢ひ
ど。才松氏。その根を固う。て。然國。こよひ。屢まろそり。敢て。永久の功を。以。國。七月。二日。に至つ。
思。秀誠を攻ると。と。自矢。不。も。と。波。一。久。至。貞一世の功に。於る。一朝。小盡。ぐ。然去に。あ。と
り。と。省く。益毛。詩。小。所謂。皇。千。城。者。う。この。傳。を。讀。考。誰。う。源。を。隨。ま。ぐ。ら。

捕正成

人皇九十六代 光嚴帝延元元年戦死
今安政三辰造 五百三十一年成

策之功其守城野戰之勞皆是勤王之
捕正成者本姓橋氏有忠義之勇有籌

志也人悉知之不贅此

人皇三十一代	敏達天皇曾孫	橋
正五位下	河内判官	之孫
正成	正行	正成
正之	正氏	正之
正儀	濱川	正儀
正勝	左二門尉	正勝
正元	補小太郎	正元

本朝通記。捕公濱川。小姓。の條に。のちく。正成忠貞。絶千古。計策通於神。遇於妬。不改忠志。陷死地。不失勇武。可謂古今絕倫之賢臣。本朝無双之良将矣。累世以智仁勇称之。亦不僭言。就中可其称举者。慮可朝廷之起興。運則守。孤墨待时。到察。可其衰之。運則以躬報。朝恩苟非。通于人道之理。乱達天道之盛衰。豈能造于此乎。後世恨議。揚戰輕投。一命英雄之心。地孰人察之乎。惜哉。傷哉。天不資王室矣。蓋棄筆數乎。と。を。え。る。

手のさりやう

補正成の記

建武元年春二月諸卿後よりやう。総軍卒の恩賜ハ遼渾に至るとも。まづ大功の諸おれ
方て。その黨を定むべと。檢非違使左諫門尉に任じ。お津河内の西園を賜ふ。或ひ
はちく衆官河三州小封びと爲るに尊氏東及ふ。再び札を起さに因て。義貞正成を立て
追討の宣旨と。蜀り。この大敵を防ぐ。と。ども。義貞竹の下の戮ひに利あらず。じる氏猛威
を衰えに及ひ。帝を保護。竈山に登り。そよよろ後。由肺肝を摧。神機妙算の奇
計を設け。さすめに。威勢破竹の。どき。する氏直。安。軍を退け。奉と白降を。めけ。ども
時。体傷を。産みて。残死の尸を辱。祿。あり。世に。ひ。泣。勇を用うるの術。計。更に。人。鬼の妻。生て。
敵軍を。疑惑。あきらめ。且。懈ら。む。に。五。漢の子房。陳平也。再びらの。世。ひ。牛。ほと。父。ども。貌
う。と。が。右。に。生。ん。華。と。ど。も。否。運。の。衰。ふ。と。及。ん。と。如何。と。も。ま。ぎ。や。う。す。そ。氏。丹波。次。を。もの
時。義貞に。謂。て。ひ。も。そ。氏。已。に。勝。を。破。は。速。小。逃。が。獲。つ。べ。と。ひ。固。里。身。考。の。痕。て。ひ。ち。く。兵。と。又

ども金鐵にあらず。づる軍士三千を疲敵す。これを追ふと勝利す。と正成また推逐。我
疲まざば彼の疲まえ賊軍の怯意一び蘋生せば後難期ふくらん。と諫むとども義貞聽ひ正
成復北島頭家にことを説く。頭家こよとを辭してはまく。賊を討するの節度ハ義貞にあつて
我にあらず。と正成奈何ともさうとう。毒弾射りのふ及びて氏再び義卒を集め。毒弾と
襲ひ人と戦一けん。義貞頭家正成の二ね命を受て軍一。義貞斧門に至りと戰う。雌雄
いまど決せざる時。正成櫓をえと神傷よう回つ。敵の後に出て技を攻む。妻義防ぐと撃たれ。妻
大敗きて渾河に還る。正成義貞と兵を拿め。また打牛の宿に被る。氏兄弟力屈し。船
にまで篠笠にまは。正成一蹴ふ敵を退け。義貞に謂てまく。功へ成難うと敗き易く。機
い得難うと失ひ易く。必破竹の勢ひにまで縛てこよとを辭う。一舉て賊を屠らん。今忽
かく時を違へ。もと氏再び勢を振り。大車をうんと諫むとども。義貞とお妻の別をを惜。之
西に去はのまう。正成復諫むとぞう。お軍の心内侍ふ在て。敢て西征の途を塞ぎ。万世の功



を棄は何ぞ亡きの戒を顧みるやといひけども重負大に懐はしきあくとゞども猶果よ。接に差しむる氏兄才流紫へ渡り兵士驚ひ大舉て攻撃は朝廷まことの兩ねに防ぐべきより令せらばはよ下正成流業の軍總帥失くあらずに防ぎ難きとてかつて一の隊を敵トけひとど防門清恵ことと拒之。毒もまことに極りかず而て正成必死を決め櫻井の退れ故。その子正行を河内に歸り。淺川に陳して大敵に對し。終小一族滅だると人のよくかる所多。獨ことよう後のこと正行正儀の小傳に據へ。或人多く補正成。爰及軍功あるのこととす。あれよりて世人の及むる者殊あくべ人の耳目を惹き。が後世に至りて。軍略豪勇のみとべつ。うくに然ひ。おん始め。帝の船を受け。旗を赤坂に舉へとき。左右前後より敵にて。一人の援くる者なく。死るを一人孤單に経て。不無念の大軍を引うけ更に勤ぜよ。て數月を守は。ナや軍殊智略あくとも人の和を得るにあらず。八年う妻時も堪へえ。あ人の和を得はく。人が平生の行ひ。民に惠を施したるあり。また戦ひの後にあり。王室目に衰へて。諸

國に北朝に歸り。宮軍僅に紀州の諸城。まこと流業に乗じて志操を易び保らう。レヒガ是さへも満ね軍に降り。紀路の諸城も落しての後。よう捕家が千劍波の一城固く父祖の遺誠を守つ。下せども降はとなく。攻とども落る。累年忠孝の名を失ひざる。偏に正成が修業は。民人お家に懷くが故なり。偏て久捕正成家臣のうち。廉直にて嘗界下ち。更に私を擇こそ。一郷或ひ一郷を守ら。貢税をうび政事。正妻のこ下河内。何との里にや一人の農夫あり。との家極めて貧乏。人性至孝の老翁。老翁母。老翁ひける。その母の頑疾病に罹つ。次第に惱。心のまことに徳も達だ。日救絶るやどり。病ひ重り。医者令且々お迎て看。天未明起。不休て歎けれども。餘方う。老翁にその頑地鉢より。こたえり。一函人あり。その容体をみて。子にのぞう。つても難治の症と。ども我某を施さば。十日八九の治すき。然まどもその某舶來にて價貴し。貧窮の汝。及べ。せを擇てす他。か。然へて別

う。と袖を拂つてまわらんとする。ところ妻時とお止めに宣ふてくあはど施すべき事
と價を一とて母に供へ死するを看てあはき先の價何斗と示り及へ六枚へ
とて西陣の店で改至度を感する。黄金千枚にて療ひへ。といひ農夫へ前で頬け
てからうがとての賣家にて總百文と小心に任せば。次て十枚の黄金に於て整へんと難けれど
父祖より傳へ田地ある。是と併て整へん心盡き今賣る。お茶をあらすま。明日ハ黄金を整
え。とてよそとて彼西陣へ家に販て二點で配剤をとへ。農夫は是と頬に剪下母に進むる
味よしとて御苦惱の池とけど。農夫の大に教ひて近隣で並てかの田地を治まゝすと頬に
治さび。渋く毛を貰へ入る。黄金五枚を整へ。是と西陣に連とての事。お産て遣て十枚の
黄金を得てもともとども縛ゆび。まづ五枚を進ひへ。残りが不日にやせうて。ちの教に免人といひ西
陣へこまごとて受納め。毎日毎晝奈へて療治をす。にち茶の効能ひ。さうめに重きも稍くに病
勢半減ト。農夫が大に歡び。残すの黄金を整へんと。千ぐれ心を解くとども。お後の方

又達び。英たる西陣農夫にひき。角へ取つて五枚の黄金を換る業へ登つ。残す黄金調
達せば。あはままでして上ぬ。但病人の再感の治療の足らざる故に。お典の所へあへ。此後
てお湯らとよと。農夫詔本悉く。是とて治療を止。まことに憂る。前功の空き
のことを病勢も猶易らん。がとてゆて残すの黄金替えければ約束の剤を投下の事と夫
より奈何にうにけん。その翌日黄金を替へ約束の事と供へ。西陣へ是と渋て療法うち。薬剤と
供へ。實に至考の感する所。先母の疾病平伏せ。農夫は教甚確焉。手の齊甚の確もて
おも。然るに一日お所の莊屋先小立て知縣の官吏。夫庭に來つて農夫を捕め。有きてつもを
供へ。是ゆきね老母ひ差のいれ。その是處を辨へ。後に著々往て候ふ。肩にての農夫に近隣
の馬を盗そ。他不治る。その馬をひとと見て。求めてる人を正ひ。この農夫はう賣りとひ。傍
こそ馬の盜人あひとて。かく撫めらるに。れて官吏農夫に向ひ。つにも下僕盜み。その放
ハ如此と。五枚の黄金へ。母の命絶人とを用て不貞の事へおきと。黄金替へ例え

けまご。盜も他ふ治るなり。今い老母も疾病にて人並にうねり下樓刑罰小行ひ。す
と。終て憾をあつと。と少くの事も言へば。官吏ハことをせし農夫が至孝の心を憐れ
その罪と述べんとすまざ。國家の刑法をさへ。奈何せんとの車で正義に訴へけり。正義はて歎息
かる孝子へ世不稀。さること不幸にてその家を貧く。老母ダ重き病ひふまつて。他の馬で盜むふ
至る。嗚呼。誰が遇ちよ。豫て一郡一郷を指揮する。夫のことを鍾て赦ふにあり。夫あら
らぬ。職に怠つて。その仕事も甚ざる。吾夫とぞ。その誠意我小あり
と深く。その身を様え。馬をひき馬で返さ。求めくる者ふ。金を返し。夫を彼孝子づ質へとす。田
地を償ひ。彼にあへ。その他ふ。物を豈べ。ちの至孝。それをせしは。且ちの医師も重き病。て奉
さる効ひあまと。國ハ仁術と云ふ。れど。かの仁を以て。不仁。と。ちの娘。て退放つ。てふ故て。母子分离
是と觀は。人あり。ありと尊き國主。と。作ぎ貴之体を慕ひ。備車あらび。惧れにあらず。心の裡
小誓ひ。この修補。の仁政を行ひ。と。無事を厭ひ。て省くのみ。

那和長年

年曆正成全

那和長年者伯州之豪也元弘年中後醍
醐帝逃出隱州徵幸伯州長年奉迎之以
船上山為行宮而破賊兵因賜因幡伯者
兩國建武之役最勞軍務戰死

那和長年 年曆正成之全
其先詳ナラズ
那和或名和作ル
長年 又太郎
長重 伯耆守
長生 小太郎 左門尉
那和長年者伯州之豪也元弘年中後醍
醐帝逃出隱州徵幸伯州長年奉迎之以
船上山為行宮而破賊兵因賜因幡伯者
兩國建武之役最勞軍務戰死
按は小人を嘗賢にさく。名和長年初の多々長高。伯耆名和の人。村上事の。又其平野
王十五世の裔。故を承てまく村上氏と称ひ。父行高も祖父行秋。承久の役。王師に隨て
東軍を守護に擧ぐ。北條氏の為に食邑を剥らる。長高名和の力頼とう。萬健也と
射を善く。家富族庶。一きくと云ふ。また。村上源氏下にて最も族大

古井傳文詒卷之九

一郡王六二非扶

那和長年の祐

えぬのれ。後醍醐天皇。應永の國へ遷さとて坐けり。侍本富士名判官。義綱。ま番
守護の時にあらず。良きこの事。取奉り。遂に下記。もひつこと。女房。小糸。てそのとを
奏す。事ハ怪しく思。を。まづ心を戒め。心を誠さん爲に。もの官女を下さとける。も。義綱。ゆく心を願
け。出雲小波。幡谷判官。高島。さと。袖らひて。頬てその用意。と。まを。用て。事ハ六條少羽忠顯
ぢうり。と。俱。より。藤九郎。が。忍び。宿。する。竹原。の中へ。出御。ある。是より九郎。が。針。らひ。て。序
ま。の。あせ奉。と。仰及。名和。の浦。に。著けり。忠顯。卿。駒。より。よ。と。この。き。に。武勇。す。と。は。え。る。人。あ
り。や。と。向。ふ。道。行。人。養。て。の。も。く。名和。又。太郎。姓。年。と。ま。う。と。考。の。ひ。づ。家富。一族。庶。う。と。射。と
善。し。心。ま。剛。の。者。あ。と。ひ。と。り。忠顯。な。よ。く。被。禮。し。頬。て。勅。使。に。立。て。如。此。か。う。長。年。づ。武。勇。祿
と。あり。聞。一。を。も。難。い。と。ば。聞。憑。三。あ。べ。と。そ。則。勅。使。を。立。ら。も。憑。れ。あ。ひ。ま。不。勅。養。あれ
と。あ。け。且。長。年。へ。こ。の。程。よ。幡。谷。ち。の。氣。が。語。ら。ひ。み。う。粗。を。薄。う。と。つ。ど。も。あ。の。月。ハ。族

潛龍飛出海島

忠義滿山

唱征討

計畫

行在安危

長年の圖贊

大

旗旌



方丈あるをよし。白布五百疋を旗に旗へ松を焼て烟に煙を近國の武士の家の紋を焼首て
山處の峯。彼處の樹間小手うけと。峰の處すまを籠もと。どのどて。数万疋。餘りうすく見
え。おけひとて。龍。彼。判官。清。すま。が。酒。と。奉。は。朱。赤。通。と。毛。の。す。と。壁。と。邊。蒐。人。と。う。け。見
ど。酒。と。名。判。官。發。銀。か。計。ら。ひ。小。周。て。船。あ。け。よ。後。を。あ。く。も。う。先。舟。と。邊。し。頃。て。船
の。營。あ。け。ま。と。月。廿。八。日。會。假。に。著。ふ。と。わ。於。て。生。雲。伯。耆。石。與。周。防。の。軍。兵。等。地。集。ま。て。二
千。竹。渡。船。と。柳。よ。せ。と。攻。幕。さ。と。と。う。ける。軍。勢。の。う。ち。憑。こ。切。る。總。合。判。官。高。島。富。萬
判。官。義。綱。朝。山。六。郎。ま。と。佐。渡。前。同。者。ひ。く。宮。軍。に。屬。て。敵。と。あ。と。今。い。更。に。ま。き。す
き。達。れ。打。底。ま。と。舟。に。うち。ま。と。若。被。に。著。ま。夫。う。り。敷。發。行。り。儀。の。船。と。先。事
の。面。舟。ま。と。渡。及。び。石。見。安。秀。美。作。備。海。備。前。候。中。周。防。長。と。外。四。重。九。州。我。我。
前。に。と。競。ひ。未。と。と。の。勢。数。千。万。の。隊。と。ち。く。四。方。三。里。づ。圓。あ。人。あ。だ。と。つ。と。ま。く。家。く。の。旌
旗。天。を。揃。め。劍。戰。屋。た。の。霜。の。ど。く。か。て。聖。運。を。ひ。う。そ。ぞ。す。も。言。勝。の。や。う。し。を。そ。え。に。け。る。

ことよりて。長年。足。所。く。れ。成。功。を。基。あ。う。が。そ。の。青。名。一。時。に。使。え。敵。軍。を。憚。う。ふ。う。
か。く。て。聖。運。を。岡。を。り。ひ。長。年。そ。の。功。大。あ。う。が。周。惣。伯。耆。の。両。函。と。楊。ひ。伯。耆。守。お。堡。を。
そ。の。頃。時。の。英。傑。を。二。本。一。竹。と。移。け。り。二。本。の。捕。伯。耆。結。城。一。竹。ハ。千。種。な。り。か。く。て。尊。氏。筑
老。志。大。兵。八。十。万。精。と。卒。て。攻。登。は。あ。う。と。生。雲。伯。耆。周。惣。の。兵。二。千。を。以。て。出。因。に。出。る。こ。の。時
正。傍。の。軍。利。あ。う。び。城。軍。事。教。と。築。よ。す。う。と。主。ト。ハ。正。傍。小。遊。す。と。若。和。長。年。長。と。少。年。小。獻
山。れ。到。る。ハ。不。武。う。と。還。兵。二。百。疋。を。從。て。且。利。の。勢。を。破。は。賊。軍。長。年。が。旌。旗。を。見。て。遮
て。殺。す。と。屢。な。り。長。年。行。戦。ひ。と。ま。を。挫。ぐ。と。十七。回。連。に。突。て。禁。闕。に。至。り。馬。う。下。そ
宮。中。と。巡。見。一。淨。を。垂。きて。闕。と。出。地。て。山。と。下。そ。一。と。こ。の。一。車。で。り。そ
一。と。こ。の。二。百。疋。の。小。勢。で。り。と。壁。と。さ。寔。闕。に。到。と。拜。ひ。尋。常。の。老。の。車。を。ざ。や。と。の。一。車。で。り。そ
長。年。が。英。雄。剣。毅。を。か。う。ね。べ。と。此。年。延。え。七。月。正。門。お。在。る。所。の。狹。野。篠。を。宣。め。て。賊。を。撃。に
そ。の。糾。糸。金。給。せ。せ。と。長。年。ハ。長。員。が。隊。に。あ。う。と。此。年。延。え。七。月。正。門。お。在。る。所。の。狹。野。篠。を。宣。め。て。後。賊

軍勢ひ蒐もあより。兵員と相難き。二百の徒兵もあらず。大官に敵を侍つ。賊軍湖の湧が
どく。遂來つて急に圍む。長年一世の勇を彰り。後門を開いて連りて戮ひ。賊徒殺盡と
冬とも猶群衆も素勢ひ。峰の巣木も羣の連に散る。如くうまび。拂へどもすこある。う渦金錢
の身にもあらず。渾身救箇所の傍で負て、兎れ札軍ふ討死。一矢名ど累下に註め
附て、ひこぼす。翁義員ふ從ひ。白鳥の毛を追ぐ。兜臺じまとて描て。一州二木の腕に戮
た。今この一木を餘りひとつ。長年遙たどとを獲。うづ毛の邊ヨリと識はあらんと心ふ愧て
この時ふ毛を決まるの心あり。因てこの軍に逃るべく。遁ひよどと大官に居て。兎に戮死
す。とうや。後學ことを辭してゆく。耻兒女子え。一言果死於輕忽。自古昔死
義守職之士見之。豈為盡死節得。忠死之勇士乎と悲とども大層の哀
は一本のよく支ゆざ。長年一職死私榮と可せざべ

赤松圓心

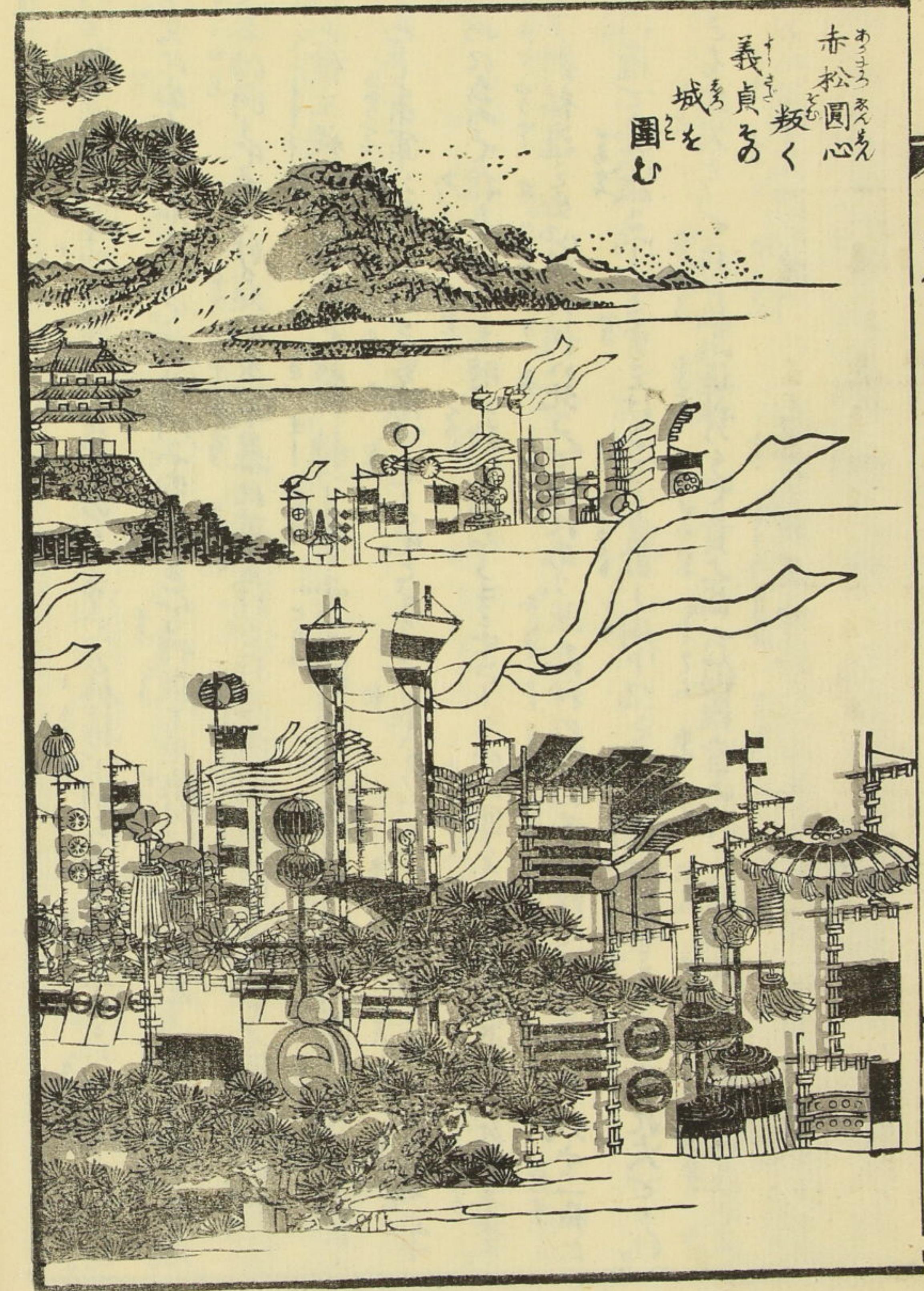
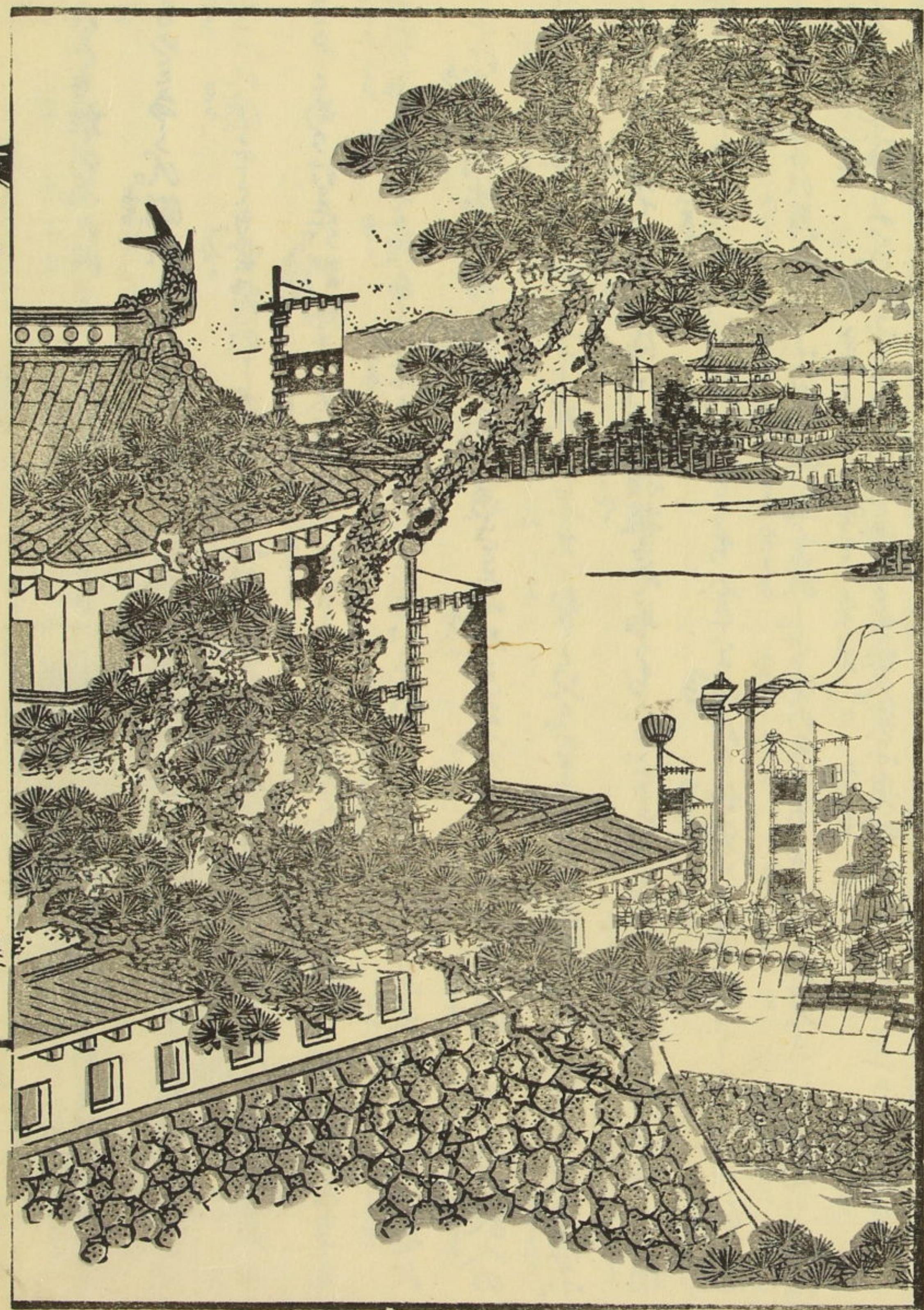
人皇九十八代 崇光帝觀應元年卒
今安政三辰值 五百七年成

赤松圓心者受護良之命與六波羅
之兵相戰頻竭軍勞然恨無恩報及
尊氏之謀反也率其子弟而歸之遂
為官軍之巨害

赤松圓心の祐

護良親王大義を企てしとき。律師則祐は宮と親し故に宮あきに贈りひ。その父圓心も前と楊あてふので橋慶ふる兵と奉て若總城を拠は。時小東兵十銃被を攻めて。奏利あるび居らるべ。山梨系の間に出じ。陰山陽の通路を塞ぐ。因て六波羅の令を受け。左備のふをうび安藝守防の兵。圓心を替へんと。圓心長子筑前守。範資をそと遣え。範資舟坂の險に出て敵の劫辭を察ひ。夜討して賊兵二十餘人を生捕。大に勝利を得うけ。圓心を魚捨う。一人も殊さうとう。三縛を解て傍ひけるが。伊勢大和次郎もの中にあり。その恩を感ト。忽心を魏へ。宮軍に合体す。二石の城を築いて。西の運送を塞ぐ。因て中玉頗り小猪役。圓心大に歎び。軍勢の隊分ご做れ。皆及摩耶の山す。假の城郭とて人馬と挫く。不日に衆所へ登らんと。六波羅より早に赤松を遷治せし。と佑く木判官時信と常陸不同時知をし。三井寺法

附て加勢と。摩耶の城へ向らば。そあうまき二万修造。副らまくと。僕えーが。圓心嘆て大歎く。不意に出んや。若ドと。酒井川不出てこよと。待敵を。川と渡りねど。軍ハ必明日あくえ。と畠油断と。あうけり。出ふ。軍暴に蒐立け。元来衆寡敵一ぐく。と。多て多くの兵士を討。是僅主従六騎と。敵に難う。遠く。小屋野の西に控へ。味方の陳ふ。起きて。おもと。兵軍ハ。將赤松。大勇威と。思ふ。と。ます。が。進す。り。圓心と。ひて敗卒と集め。二千け。まど。兵軍ハ。將赤松。大勇威と。思ふ。と。ます。が。進す。り。圓心と。ひて敗卒と集め。二千勝勝に。うて推考せ。妻時ハ。敵と射ち。まき。もの。大軍不意と。替え。と。あくに敗を。六波羅。と。攻破。と。勇しける。と。三萬敵と。同ド。そあ。秋宿河系を。と。在家に。大と。六波羅。と。攻破。と。勇しける。と。三萬敵と。同ド。そあ。秋宿河系を。と。在家に。大と。そ。生を。拒め。と。北の敵。逃撃。うそ。責。よ。は。六波羅。案の外に。族。と。調。固。と。構。に。在系の武。士。三万修造と。相副。桂川に。ことを。防ぐ。折筋。雪渕に。川水。くる。後。主。渴。と。難。け。と。五。矢。軍。に。時。を。移。ひ。律師則祐も。矢。未。解。て。散。く。に。射。う。が。矢。軍。の。こと。勝負。決。せ。ま。つ。ぞ。也。此處。て。後。人。



といひも敢て馬に跨る。も打へらんとするもどと小圓心とよて尋止め。この頃の雪消を。水嵩湯
のこゝろび。測瀬もかぶひ馬で進入。推流さまくもんあ。相虜とよきぞ。すや亦憲う。
彼岸に渡まとも雲霞のとまき勢の中へ。渡池から必討生え。天下の安た今日に限らば。早
まうとありけど。則祐まづ太刀で收め。從容とて言ひゆう。つみゆは彼のとく。禁まどもつ
軍勢渠に對する程う。ば幸うたまきとて倣ひ。敵が百分の一の小勢であり。大敵を破えへ速に
さまでに表へ。捕縁う。ば小勢う。すと透き正そ破とう。太もう兵去にも。兵勝の術。密れ。敵人の
機を奪へ。遂不その利ふ幸。疾その不急と繋とつ。こよ喜この國兵。せりて。強陣で敗る様。
坐す。とひ捨て。假り流体川水。推波きて馬うち入る。こよとて飽ける。伊東。何奈林。小寺相
模。宇野。玉敷の五瀬引。川へ覗とうち入る。中に。伊東ハ馬強也。さて。剣一き。流。獻
を。生。死。交。字。に岸につく。小さ相模ハ馬。放し。と。兎の天きだ。水の上に。見え。水底。と。潛
け。今。先。小瀬り。す。立ち。瀧の水。と。壓け。景勢が實。鬼神の。と。そこ。五人の威勢たす

得の大軍。恃と。東西に。碎易。と。蒐んと。す。者。也。于時。能布守範。資。本範良。ああ。下ま
は。うも。続け。者。共と。下れ。と。す。半竹傍の。所。兵。も。一回。小川。打へ。と。が。さ。一。小瀬。は。川。水。も。是。が。為
不。堪。と。や。平地。を。歩行。と。く。う。よ。ば。こ。ま。か。と。と。う。渡。り。と。ま。ニ。責。戮。ふ。是。に。圍。て。六。波。羅
勢。さ。と。り。大。軍。と。ど。も。機。を。存。ま。て。義。勢。う。固。き。龐。ま。て。え。け。る。赤。松。勢。勝。に。あ。て。
堅。模。に。蒐。立。と。ば。一。支。り。う。と。引。遇。て。何。方。ま。で。も。と。逃。蒐。て。ち。も。系。附。へ。札。へ。六。波。羅。の。兩。檢
断。大。不。猿。さ。例。の。ま。と。獨。固。す。橋。河。野。を。と。敵。で。所。く。に。防。籠。け。る。が。大。宮。城。川。橋。限。を。袖。
小。路。五。旅。箇。所。不。火。起。て。焰。く。と。聚。て。膳。夜。の。と。う。と。が。勢。の。多。少。も。不。え。こ。と。ん。あ。の。ま。浴
中。一刻。に。減。び。ぬ。と。む。う。え。お。け。る。ま。下。る。橋。獨。固。の。兩。ね。河。野。九。永。左。工。門。陶。家。永。故。小。勢
と。え。室。あ。で。陳。を。整。攻。打。わ。ど。れ。長。途。に。勞。と。赤。松。勢。勝。馬。武。者。小。宮。五。五。と。死。力。を。表
ひ。逃。は。も。有。り。此。處。波。处。不。安。乱。ひ。か。と。六。如。何。と。憂。は。わ。う。一。隊。の。人。馬。進。三。未。は。こ。と。何。若
と。又。る。所。に。大。湯。宮。の。近。所。敵。の。主。忠。令。を。受。て。援。兵。の。為。未。と。る。な。り。因。心。大。に。歎。び。て。ま。と。

より多勢となり。圓心大に威を震ふべからば。後聖運で開をひて、一統の復軍功の賞を行はば。始め大塔宮則祐をして、圓心を語りて、さる忠誠の功第を備前守に封せん。ありまことより船上より。如斯このもの縫合を復して、其るに圓心若歿して、國家の為に功を立す。恩賞厚細鐵で停らまけど、圓心大ふとまこと恵こと君を恨み奉つる。氏直後この後に、美作の大莊を築所と赤松円心に與けよ。併し供こそ是利小親を厚く、縫合の時に及び朝家を數え、是れに屬し。圓て、官軍養ひ難く。主より竟に芳野不入。微々とあくせむひけり。傳て、又の恩祐のこと。公卿穿経せし處と、ども准後准後の臣に入り。護良慶圓心小勅約のどく。費支と奏さむ。ども准後と准後と快くねば。護良慶が奏との爲め、藩物のひとを。婦人の長吉、玉家を棄め。相模の先端をのこす。以て國心賞の薦めを恨む。君の叛ふ不思ひまじ。君又功臣に禄を食ふ。縫合を食ふ。及び復る人深く惜ひべし。

宇都宮公綱

人皇平代後光嚴帝延文元年卒
今安政三年正月成

宇都宮公綱者姓藤氏與正成欲戰于天王寺不果其後軍事若干

藤原朝綱	宇都宮
三郎義時	
朝重	宇都宮源景
左兵衛尉	
法名達生	
五代孫	
貞綱	備前守
治部大輔	
從四位少將	
下野守	
公綱	宇都宮
治部大輔	
從四位少將	
氏綱	下野公綱

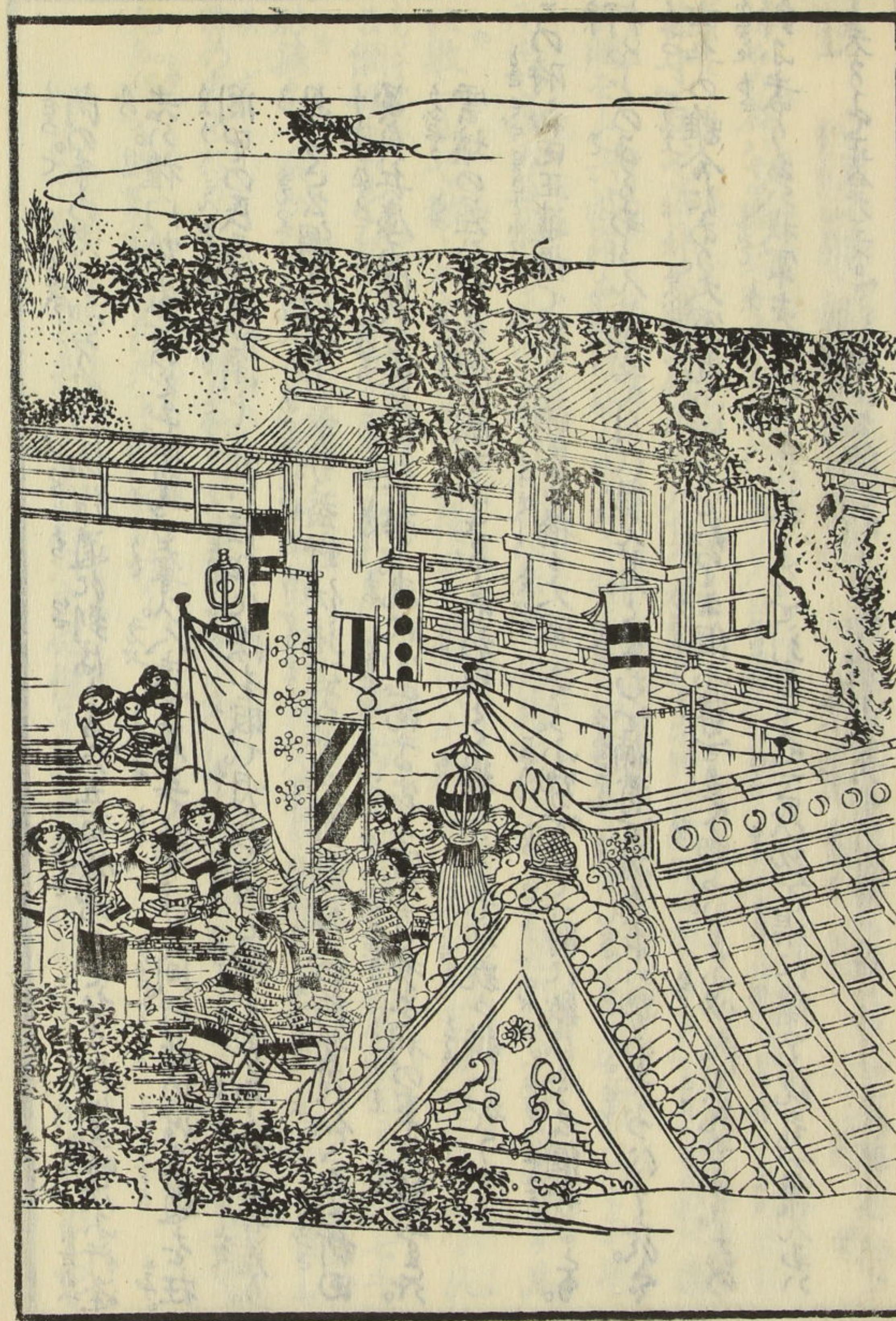
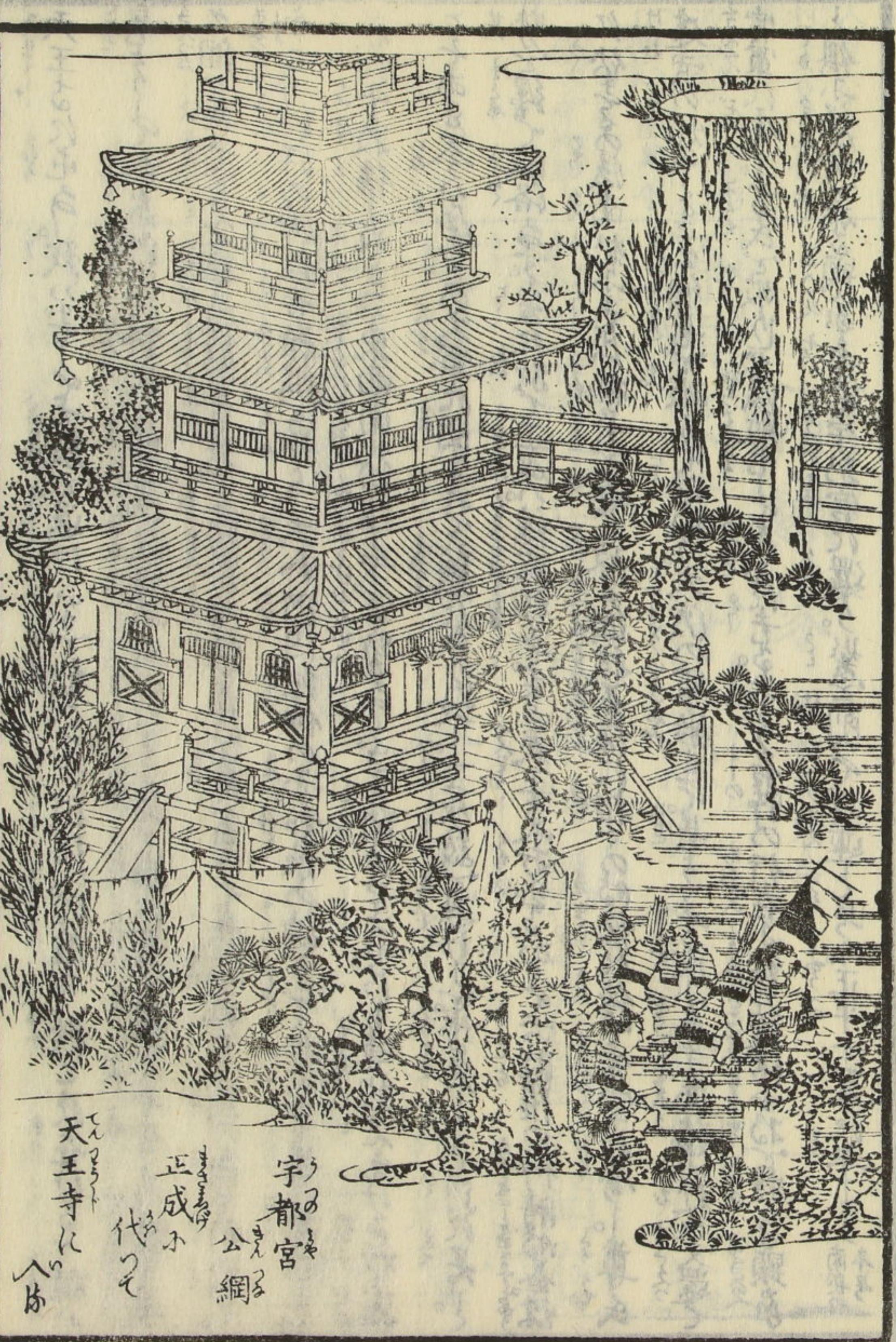
傳へて、又公綱千鶴殿の妻子られ加賀にて、大ね阿曾渾山少弼治時大佛右馬助高雲、金澤右馬介、奥多に御後て、この城を極崩し。と切岸の下より掘りしきて、下安ふ緊しくて、間牒を入れの駆かけよ。捕もことをうづ。大手の大金一ヶ掘崩し。既て、妻子城中へ移へらん。けよども、太木大石を擲げて、よう防ぎしきれぬ事す。多くことおとす。死す。老母をかばひ、慈母とも公綱が工夫をも構へを握りて、うける。一つの名も、ひきうるげりえ。

宇都宮公綱の話

初めの名は木綱。通称永と私。下野の人。其先は右大臣藤原兼通より出づ。公綱は
權守を経て、治承大輔小姓。元弘二年札起つて、京師六波羅の勢少きをりて、す時入道
公綱をして、六波羅を助け守らせ。小楠正成ハ四天王寺に軍。近に京で葵を養ひよ。是
小園で鶴岡通倫。も橋宗康の兩ねに兵七千侵攻。而して、京で葵を養ひよ。是
に敗りて散々打さる。六波羅怒て、遠田ハ宇都宮公綱をして、正成を殺しやせと。
公綱領賞して、紀氏清氏の輩と聚むれ。その勢がて、七百強なり。初め鶴岡の七千
伏勝も、残ひに利あざる。今この小勢で、向ひんて、更に勝きの理うり。とども、軍を
勢のまゝによう。ひそかに軍勢一致する。離島との境にあり。進めや進めと下かさう。同七月十
九日、都を五て、榜篠山の天王寺へ向ひけり。

桜は一本にそく。東寺をままで、主従僅か四五歩。徑に入り、海中にあらず。

所の手の者地加ノテ。四協作道に到はしまふ。五百餘步、ぞぢうにけ。帝次小行達
老の權門勢家とぞ。馬を奪ひ人夫を蒐みて、通りける間行旗の性及道を枉。
園里の民屋扇て閉す。松の桂松に陳を取て、明月を待と縁より。平文と畠差り。
且まく公綱が行軍の景勢。蓋野伏張盜みどう。亦、猿猴人の所業に似る。新田
義貞兵庫少蔵。軍勢の孔方を棄す。晚に小山田家が軍。青麥を刈の車に競ぶ。且
雲壤の差ひの。公綱が威を示さんと。わのとく縛せらる。是非孰う辨へが
この時和田正遠渭て、もく。鶴岡の橋が大軍もく。小勢で以て、一時に敗は。今公綱あると。す
何やどのゆるあらん。蒐みて、目に物なせん。と勇むて、捕首を振り。軍ハ勢のまゝによう。は
士卒の難合にある。大軍戦小敗。とて、かよ。公綱小勢で、りて、向ひ。こゝが必死で、究め。は。お
鋒小まい。お。我軍多く村生え。差どとて、引もよ。て、ひか。て、渠に壊つ。視れ。て、捲ん。お
と。未だ。正成天王寺に引拂ふ。公綱がともかく。先。二。先。お。お。地著て、残り。とするに。敵。う。お。て



天王ちに屯す。残りをて大敵と遇け、走て歎びて六波羅へ向進す。將にて在けるが捕はる。是よりて、わ泉阿内の野伏を屠らひ、秋條や外の甲斐生ぬが嶺に篳て燒せしや矣。威勢す。公綱が兵もとえで、婆波敵をもと、防波の准候をみだれ、然ひあて後ハ明ねまく次の夜もかのゆく。剣にて、御の浦住者、雜波を屠ら。大和阿内紀候の玉、わ泉の浦をくたばる、篝火星の下。前に半殺倍の主、東西南北四維と下軍物力あらざる防ます。主を、乃も凄慈悲えける程小始り。こそあと今ハ屋上の大軍に囲まれて、六鐵にうねて、一とび敵と遇け、手を名とて列に差す。勢と縛て、自洛す。更に放て正成ハ殊威馳て、また天王もお坐る。かくて六波羅の仲時賛益珠に休まむの後、南朝小毛は楠尾を逐て攻公綱殺忌役に拒ぐの時、諸に依て官軍に屬す。尊氏達武の札のとまき公綱もて破りて功あり。大波の軍敗とて、是よりそも民小屋一西海小赴き又還す。官軍に属し、尊氏と破りて、後敗もて奉ふたる天王も吉野の行在小宿左近傳少ねて授らる。顯家と俱小糸念を破る。顯家卒て宇都宮に還り、髮を削て理達と号す。正平十一年に卒す。年号

人皇六十三代
村上天皇上二代之

孫

源顯家
陸奥守
北畠准后
從三位中納言
鎮守府將軍

源顯家

年曆義貞公

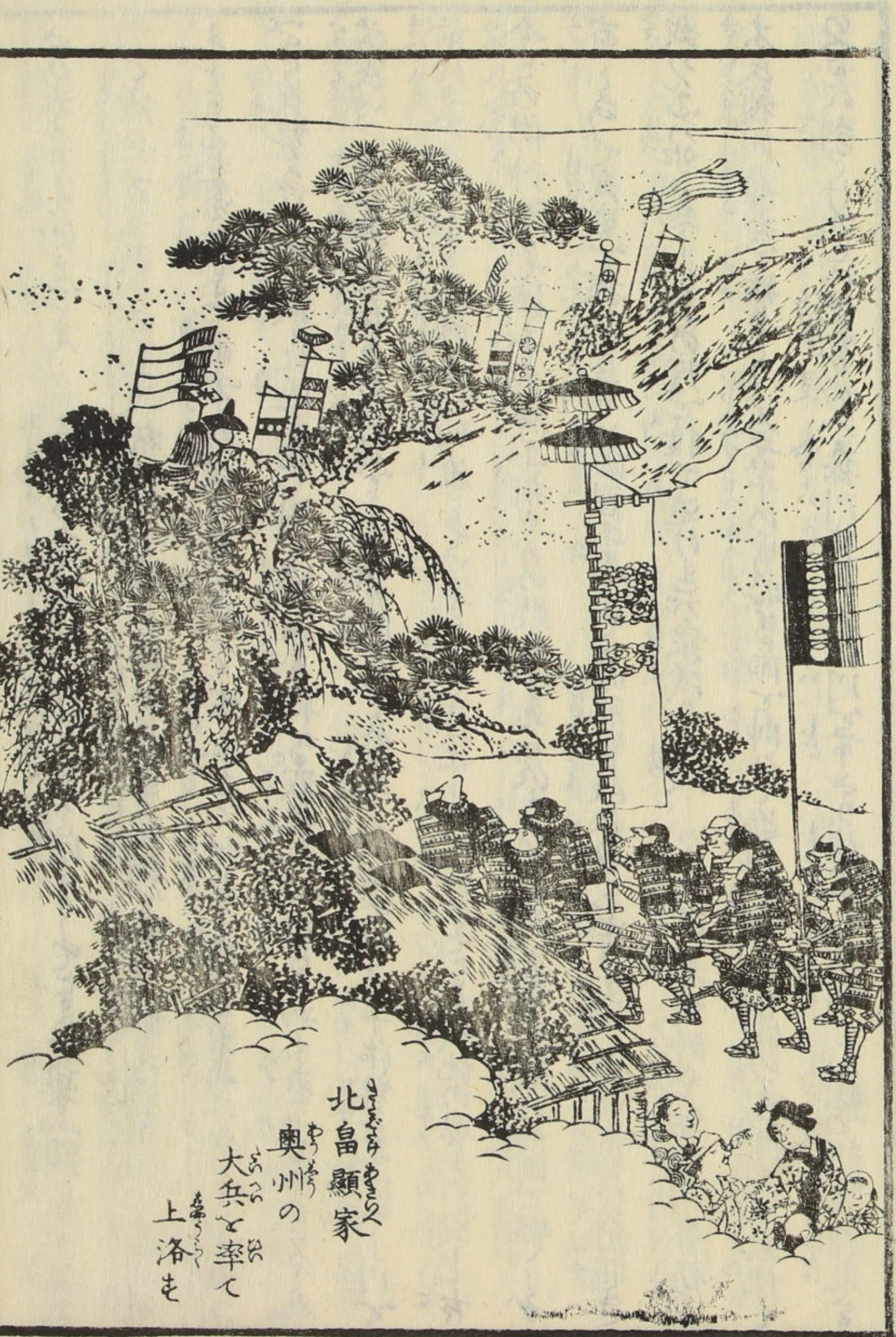
源顯家者、村上源氏之縉紳也。弱冠叙三品任黃門且兼陸奧守。在國時聞有建武乱帥師入洛破尊氏拜鎮守府將軍。其後再舉討賊屢有勝利既軍敗沒於陣惜哉。

傳に、元弘二年、後ノ、陸奥守とす。義良親王を奉じて、陸奥出羽を獲む。親房之を輔す。親王を奉じて、陸奥に如き相馬胤頼光康を攻む。とす。

源頭家の話

頭家ハ 村上章の孫累世芳経神而て從来豪武の家にあひて久ども人とうり仁恵
ありて勇略あり。周て奉ることを一のひど品に叙し中納京任ぞ。奥久の牧とおして陸
奥守に補任せ。頭家が下下。徳民を接角して國内大不治まつける。然る小達武の犯
生來て。頭家大不動札。章ハ比叡山に遊ぶ。官軍の然ね粉骨を竭ひと久ども賊軍強く
そて屢敗をひこすに因て頭家に殺し。早く手中の兵を率いて義員以下の官軍を援け。す
氏以下の朝敵を退ぐべとあつけど、頭家懶に國中の兵を促して出陣は未下。半餘月
しへ行海道十五日で還り。ある威勢を露す。因て總州の兵を挙げて枝き糧とあひて頭家不屬
きの二萬斗。頭家悦びその兵を收め。亟ち山門を到り。義員正成の然ねと後。兵
勢を張て。その氏と戦ふ。その氏が軍敗はす。乃び丹波路へ奔りける。再び其平を聚めて責む
うと件の。お權威を震ひ。梓又豊清河奈に於て尊氏を退崩し。其氏兄弟船にて九州

へ奔りけり。奉もて門うちの附落へひ。功浅くらずと。鎌守府の軍に仕せし。頭家
面目を失へ。梁久輝らとける。すく行程多く。足利。氏大軍を率いて下洛。楠正成。兵庫に
残れ。新田義貞ハ恒良を奉じ。北上に下り。天下大き。足利氏の有とあひ。頭家が亦
憤る。のこり。豫て詔令をあつけど。手中の軍兵等も。時機を両端に計り。そりて速に集す
考。頭家が休武小糸と。今足利氏の威勢をさか。小糸を。舟を。難卵。と。盤石。と。譽の喻
ふ。異あらねば心きらず。すの轡へ。頃ハ延ええ年十二月。天皇を東御と。遁まひ。芳野に令て
都を達南朝と。移せし。と。そのひ。隠とあひ。さけ。と。五。頃に軍勢地集す。雲霞のどく。うし
て。諸ねを遣し。利根川に。支え。も。北畠方兵部井十郎。す。木。六郎。皆先波。大に。謀。金。勢。て
ね。謀。金。勢。敗。を。う。この時宇敷官。公。綱。指。め。紀。掌。清。黨。千。有。餘。勝。頭。家。に。降。來。し。あ。の。時
新田義典。が。上。野。を。配。り。女。二。萬。を。ね。て。頭。家。に。合。ひ。頭。家。に。信。海。ひ。法。く。既。に。謀。金。勢。入。令。



北畠顯家
奥州の
大兵を率て
上洛を



方より上陸とす。か。利方土岐頼遠桃井連幸後嗣にて。織田頭家が兵五千
十五萬食方五万より。土岐桃井より碎き。搏擊歟勢乾坤で効く。劍光迅電明て復ふ然
まじめ衆寡敵せ。重車獨遠も傷て被り。軍兵多く討死し。或ひは東西に奔走して残ふ
べき後勢うけまとば散れ逃亡す。周て頭家義興を威勢竹と破はぐわく。幸小入深きをとひ。
秀氏はて大本旗さ。在系の諸侯にて。遂に防ざとひ。幸下金謂て多く。宇治勢多小軍一川で
前に妻て防ざと高野泰勝進とひ。とひて背に一川で並び。こそと城地の要とひ。古
今二の術計とひ。而を敵を棄降小拒ぐりの敗とひ。意ふ小敵ハ万圓て候。とひ
有とひて戦城と揮ひ吾軍ハ祖裡小屋て。とひ威勢敵れ及ばず。すまびに濃のものにて拒ぎ
然りんあらぬ。とその理と推て速けとひ。衆議と小決一々。高野泰同脚を細川頼春傍
本氏頼同道者と始め。一人三千の勇將を帥て帥と近いの重と美濃の重の境うる城地と
りひれ到りけり。この地勢示ひ森川背に五花川を事す。諸軍と小屯して陳て別所行蒐す

小頭家が軍ひ青野が兵の軍にうち勝て是れ不由ひ。道と迂て勢及て經由て芳野へ到り
して既に南都小屯。白川経城入道進そひ。君大軍て卒て遠く残ひ功て殺戮
小立とひ。今賊軍墨地小立と残り。芳野に入らば。世人と聞ひて背と繋りの全きの
勝にあらば。世人不武と。悔え。差下今うり引退。墨地の敵と發て衆師不入。賊と雌雄と
決せん。といと勇一くひけと。頭家ころ後をきと。新田義興に牒ト令旨。進入て洛に入
らんと。既に桃井連幸もとて。ことを遊び聲一むる。連幸七百餘兵て卒て南都に至
て頭家を攻む。豫て朝一からとある。頭家がも隊伍て整へ。南風北風。城ひけるが。玉て生一肇
めよう。然ふあた勝ざることあり。是れと。よし。頭家が軍大本丸。相井連幸もと。青野が兵の残ひ小
緒ともせず。面を振て攻撃や。頭家が軍大本丸。相井連幸もと。青野が兵の残ひ小
緒。新田義興散兵を收め。八幡に據て陳て。また八幡を圍む。師連

大軍と卒て八幡を攻む。一時に瑞應寺とし、頭伝義與く守つて迷て接て往く。救日を
経るやどに頭家、敗卒を集めて天王寺へ起つ。八幡の援兵をうんとせり。師走れと號す。も
兵と分て八幡を圍す。自天王寺へ赴きて、雌雄にて戦ふ。決せんとし。頭家が軍大小礼主兵
士四方を散る。頭家僅に股肱の衆を。千餘騎を從へて、また芳野へ赴く。馬の臘を病す。
お師走れ早のあらはが夫と來て士卒を進め。こよと遡ふて毛急う。頭家馬を面して奮
撃。対戦時と後、敵不當ほて殺田大に勇威を奮ふ。とども、徒卒多く討きまと他不擧
兵うちその才金鐵小あり。さう。渾身殺箇所の癪で倒す。竟に安倍野に死なせら。時に年
六十一歳。師走れが軍城尾西郎左エ門武麻政清がその前で獲て、とくに頭家、皇令を承て
賊を討つ。殺戮小功を得て、王室の再興近き。あるひ及びて、一戦ふ利害あひ。安倍野の謀
と謂ひ。呼天れる哉命なる。

日本百將傳一夕話卷之九 終

